

いちまるいち

天王寺動物園 101 計画

～おもしろい・あきない・みんなの動物園をめざして～



てんのうじどうぶつえん

平成 28 年 10 月

大阪市

天王寺動物園

目 次

I	天王寺動物園 101 計画策定の経緯	1- 1
II	天王寺動物園 101 計画の基本コンセプト	2- 1
III	天王寺動物園基本構想における動物園の使命等の整理	3- 1
1	動物園の使命	3- 1
2	動物園が果たすべき機能・役割	3- 1
2-1	基本構想における整理	3- 1
2-2	各機能間の関係についての補足	3- 3
3	市民の意見を踏まえた将来の動物園像	3- 4
4	天王寺動物園の顧客ターゲット	3- 5
IV	活性化計画	4- 1
1	魅力的な動物園に向けて ～活性化計画の基本方針～	4- 1
2	魅力あるコンテンツの開発とその発信	4- 2
2-1	メインコンテンツである動物展示の強化	4- 2
2-2	魅力的なイベント企画づくり	4- 6
2-3	広報・プロモーション	4- 7
3	顧客視点からの魅力向上策の展開	4- 8
3-1	ワクワク感を持った空間の提供	4- 8
3-2	来園者の快適さの向上	4- 9
3-3	魅力的な飲食物販サービス	4-10
3-4	何度も来場できる仕掛け（パスポート）	4-11
3-5	CS（顧客満足度）向上のための改善活動の推進	4-12
3-6	天王寺・阿倍野・新世界エリアと連動した魅力向上	4-13
3-7	インバウンド対応	4-14
4	外部との連携・協働による動物園の活性化	4-15
4-1	ボランティア・NPOとの協働	4-15
4-2	個人からの寄付	4-17
4-3	企業からの寄付・スポンサード	4-18
V	機能向上計画	5- 1
1	持続可能な動物園の機能向上に向けて～機能向上計画の基本方針～	5- 1
2	飼育管理機能の向上	5- 3
2-1	動物飼育管理技術の向上	5- 3
2-2	飼育個体の維持・確保	5- 4
2-3	動物福祉の向上	5- 5
2-4	生物多様性の保全	5- 6
3	社会教育機能の向上	5- 7
3-1	楽しみながら学ぶ ～環境教育、命の教育～	5- 7
3-2	学校教育との連携	5- 9
4	調査研究機能の向上	5-10
4-1	大学等の研究機関等との連携	5-10
4-2	動物園独自の調査研究機能の向上	5-11
VI	施設整備計画	6- 1
1	整備の考え方	6- 1
2	前提条件の設定	6- 6
3	テーマ区分及び新たな計画エリア等の設定	6- 7
4	ゾーニング	6- 8

5	動線	6-12
6	新施設整備プロジェクト -展示・空間ハイライト-	6-14
7	各種便益・サービス施設 他	6-33
8	年次計画と総事業費	6-38
VII	経営計画	7- 1
1	収支に係る現状と課題	7- 1
2	計画目標達成のための対応方針(収支改善施策)	7- 3
3	施設整備にかかる市税負担低減について	7- 4
4	望ましい組織体制と経営形態	7- 5
VIII	計画推進のために	8- 1
参考 1	動物園の現況	9- 1
1	入園者数	9- 1
2	収支	9- 3
3	公費負担率の推移	9- 5
4	職員構成	9- 6
5	飼育動物関係	9- 6
6	教育普及活動	9- 6
7	来園者データ	9- 7
7-1	国内来園者	9- 7
7-2	インバウンド	9-11
8	経営形態	9-12
参考 2	用語解説	9-13

※一般的でない用語について、巻末に解説を記載しています。

I. 天王寺動物園 101 計画策定の経緯

天王寺動物園は、大正 4 (1915) 年に開園し、100 年を越える日本で 3 番目に長い歴史を有した動物園です。開園以降、施設整備や希少動物の入手を進め、規模の拡大を図ってきました。

昭和 36 (1961) 年からの動物園改造 9 ヶ年計画により、無柵放養式を中心とした動物舎への改築などの整備を行いました。また、昭和 45 (1970) 年に開催された日本万国博覧会を記念して、各国からアジアゾウやキーウイ等の親善動物が贈られ、飼育動物種を一段と充実させることができました。さらに、昭和 62 (1987) 年に天王寺公園で開催された天王寺博覧会に併せて園内を改修し、鳥の楽園やガラス張りのヒョウ舎等の建設を行ったほか、平成元 (1989) 年にはコアラ館を、平成 4 (1992) 年にはチンパンジー・オランウータン舎を完成させました。

その後は、平成 7 (1995) 年度に策定した「ZOO21 計画」に基づき、野生の動植物が生息する環境をできるだけ再現する「生態的展示」を取り入れた動物舎への転換を進め、平成 7 (1995) 年に爬虫類生態館アイファー、平成 9 (1997) 年にカバ舎、平成 10 (1998) 年にサイ舎、平成 12 (2000) 年にアフリカサバンナゾーン草食動物エリア、平成 16 (2004) 年にアジアの熱帯雨林ゾーン・ゾウ舎、平成 18 (2006) 年にはアフリカサバンナゾーン肉食動物エリアを完成させました。

しかし、近年は、大阪市の財政難などもあって、「ZOO21 計画」に基づく整備は停滞してきました。また、来園者数も減少傾向になり、平成 25 (2013) 年度には約 116 万人という、平成に入ってから最低の来園者数を記録しました。このように動物園事業が行き詰まりつつある中、大都市大阪にふさわしい魅力あふれる動物園を目指して、徹底した改革が求められてきたところです。

今後とも動物園を改革し、動物園としての機能向上や来園者サービスなどの改善の取り組みを継続的に実施していくためには、天王寺動物園の中長期の方針を定めておく必要があります。そこで、策定から 20 年が経過した「ZOO21 計画」をリセットし、これに替わる新たな計画を策定するため、平成 27 (2015) 年 8 月に、動物園の今後の方向性等について定めた「天王寺動物園基本構想」を策定しました。そして、この基本構想を実現するために必要な具体的な方策を取りまとめたのが、この「天王寺動物園 101 計画」です。



昭和初期の動物園



アフリカサバンナゾーン

Ⅱ. 天王寺動物園 101 計画の基本コンセプト

大阪の地で 100 年にわたって愛されてきた天王寺動物園が 101 年目に策定する計画として、以下のキャッチフレーズと基本コンセプトに沿って進め、公立動物園としての機能・役割を果たしていけるよう、次の 100 年に向けて頑張っていきます。

(キャッチフレーズ)

(いちまるいち)
『天王寺動物園 101 計画』
～おもしろい・あきない・みんなの動物園をめざして～

本計画は、天王寺動物園が 101 年目に策定する計画であることから、『天王寺動物園 101 計画』と称することとします。

また、昨年基本構想を取りまとめる際に公募によって集まっていた約 40 名から成る「Z00 friends 会議」において提案されたキーワードなども引用し、目指すべき将来像を表す副題を「おもしろい・あきない・みんなの動物園をめざして」としました。

「おもしろい」には、“大阪らしい笑いのあふれる”という意味のほか、“興味深い”、“知的好奇心を刺激する”場にもなる、という意味を込めました。また、「あきない」には、“商い＝商売上手な”から転じて、“経営にも配慮した”という意味と、何度訪れても“飽きない”いつでも魅力あふれる動物園を目指す、という思いを、最後に、「みんなの」には、“これからも市民のみなさまのための動物園”であるとともに、“今後は、市民のみなさまと共に歩いていける動物園”でありたいという意味を込めて副題を上記のとおりとしました。

(基本コンセプト)

- 大都市大阪にふさわしい都市型動物園
- 憩い・学び・楽しめる都心のオアシス
- 動物本来の行動を引き出す「進化型生態的展示」

キャッチフレーズを具現化するため、上記の 3 点を基本コンセプトとして設定します。

コンセプトの 1 点目は、天王寺動物園が大阪の観光戦略のひとつの核としてどうあるべきか、2 点目は、天王寺動物園を訪れる人にとってどういった存在であるべきか、3 点目は、動物園の根本要素としてどのような動物展示を目指すのか、をそれぞれ天王寺動物園の特性を考慮したうえで設定しました。

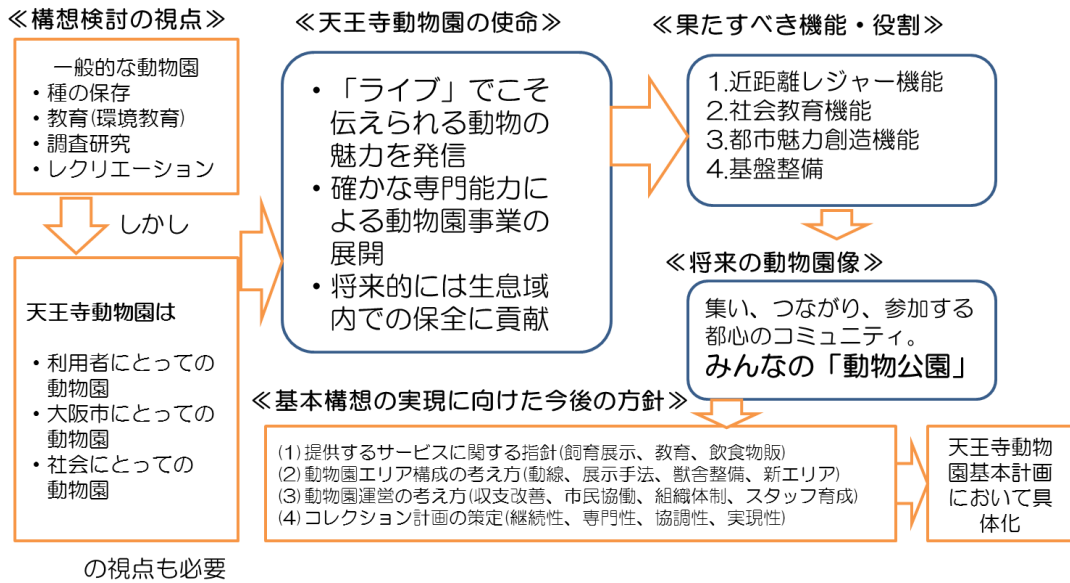
これらのコンセプトと、基本構想で整理した動物園の使命等を踏まえて、各計画（活性化計画、機能向上計画、施設整備計画、経営計画）を構成しています。

Ⅲ 天王寺動物園基本構想における動物園の使命等の整理

1. 動物園の使命

天王寺動物園を所管する大阪市建設局では、平成 27(2015)年 8 月に「天王寺動物園の今後の方向性（天王寺動物園基本構想）」（以下、「基本構想」とする。）を取りまとめました。（図 1）

図 1：基本構想の構成



基本構想においては、天王寺の動物園の意義や役割について、「利用者にとっての動物園」「大阪市にとっての動物園」「社会にとっての動物園」という 3 つの視点から考察を行い、天王寺動物園の使命として以下の 3 点に整理しました。

使命 1：お客様に対して、「ライブ」でこそ伝えられる動物の魅力を発信し、楽しみながら野生動物や家畜などの動物についての理解や自然環境や生物の多様性への気づきを与える。

使命 2：確かな専門能力に基づき、種の保存にも貢献しつつ、持続可能なかたちで動物園事業を展開する。

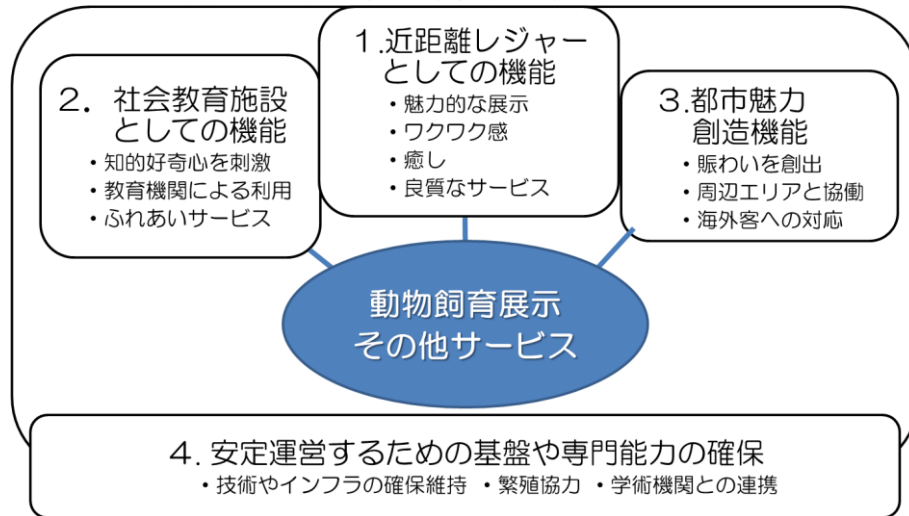
使命 3：将来的には、野生生物の生息域内での保全にも貢献する。

2. 動物園が果たすべき機能・役割

2-1 基本構想における整理

基本構想においては、上記の使命の整理を踏まえて、天王寺動物園が果たすべき機能・役割として、「近距離レジャー機能」「社会教育機能」「都市魅力創造機能」の 3 点に整理するとともに、これらの機能・役割を果たすため必要な「基盤整備」を 4 点目として位置付けました。（図 2）

図2.天王寺動物園の果たすべき機能・役割



(1) 近距離レジャー機能

お手軽に行ける近距離レジャーとして、お客様に大切な人との思い出を紡ぐ機会を提供する。

(実施すべき事項)

- ・驚きを与えるような魅力的で満足度の高い動物展示を提供
- ・体験・体感できる活動を提供
- ・ワクワク感のある快適な園内空間を提供
- ・都心の緑地として「癒し」のスペースを提供
- ・お客様ニーズに応える良質な物販飲食等のサービスを提供
- ・ホスピタリティの高い接客を提供（委託先による接客を含む） など

(2) 社会教育機能

ライブの動物や、リアルな体験・体感を通じて、自然や動物への理解や共感の機会を提供する。

(実施すべき事項)

- ・レジャー目的のユーザーに対しても、動物園としてのメッセージを発信
- ・メッセージの発信に当たっては、野生動物と家畜は峻別して発信する。
- ・ふれあいサービスの拡充強化
- ・教育機関による利用ニーズに対応
- ・知的好奇心を刺激し、知的な愉みを提供 など

(3) 都市魅力創造機能

賑わいは賑わいを呼び、それが都市全体の魅力向上と活性化につながることから、動物園に賑わいを呼び込み、天王寺周辺のエリア全体を活性化する。

(実施すべき事項)

- ・ 利便性の高い立地を活かして、周辺エリアの各主体と協働しつつ、動物園とその周辺に賑わいを創出
- ・ 海外からの来園者への対応の充実（多言語化、日本産動物の展示の強化など）など

(4) 基盤整備

魅力的な動物園を提供し続けるための基盤や能力を確保・維持する。(注:「種の保存」に関する活動は、本項目に含まれる。)

(実施すべき事項)

- ・ 飼育、繁殖、獣医療等の技術やインフラの確保・維持
- ・ 飼育動物の安定的な確保（動物園間の繁殖協力など）
- ・ 他園の先進的な取り組みや野生の生息地の状況等を把握し、園内での活動の改善にフィードバック
- ・ 学術機関との連携などによる専門能力向上 など

2-2 各機能間の関係についての補足

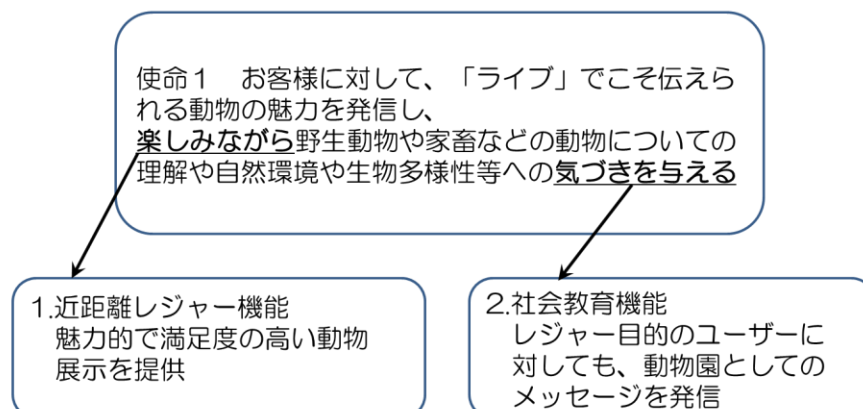
基本構想では、上記の整理について、「天王寺動物園においては、以上の4つの機能をバランスよく運営するものとする。」としています。

特に、動物園の運営に当たっては、商業的な機能である「近距離レジャー機能」と公的な機能である「社会教育機能」とのバランスが重要となります。どちらかにだけ偏った運営となるのは適切ではないと考えられます。

基本構想では、使命1として「(略) 楽しみながら (中略) 気づきを与える」と整理したところですが、これを動物園の活動に落とし込むと、近距離レジャー機能を満たす活動をしっかり実施して多くのお客様に来園して楽しんでいただくとともに、併せて、社会教育機能を満たす活動として、レジャー目的で来園されたお客様にも伝わるように、生物多様性の保全等に関する教育的なメッセージを発信していくことが重要となります。

(図3)

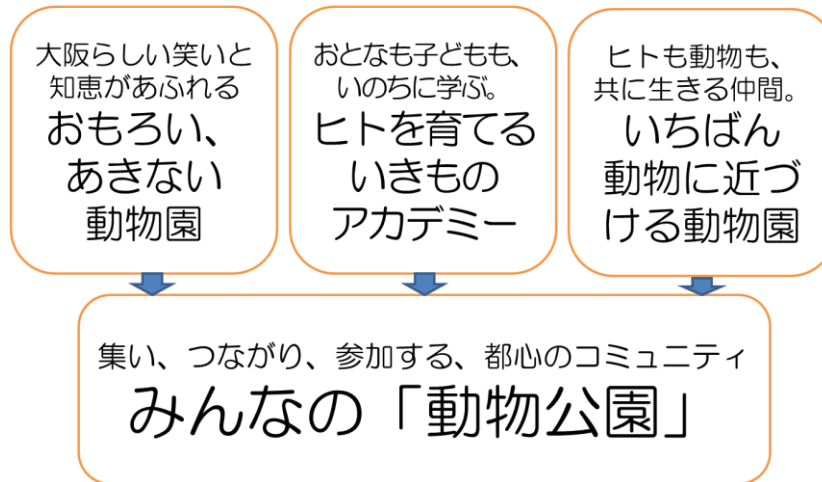
図3 基本構想における「使命」と「機能」との関係



3. 市民の意見を踏まえた将来の動物園像

基本構想においては、ゾーフレンズ会議の議論及び上記の動物園の使命や役割を踏まえて、天王寺動物園が目指す将来像を次の4点にとりまとめました。(図4)

図4：将来の動物園像



- (1) 集い、つながり、参加する、都心のコミュニティ。みんなの「動物公園」
- ・お昼休みにホッと癒されに来る。
 - ・学校や仕事帰りに立ち寄れば、よく知るあの人にもここで会える。
 - ・動物をきっかけに、見知らぬ人同士もつながり合える。
 - ・都会のど真ん中にある動物園だからこそ、特別な場所でなく、もっと日常の中にある場所へ。
- (2) 大阪らしい笑いと知恵があふれる、おもしろい、あきない動物園
- ・動物園の元気は、大阪の元気だから。
 - ・子どもからお年寄りまでみんなで盛り上がる、大阪らしいユニークなアイデアをどんどんカタチに。
 - ・笑い声が絶えない、いつも大繁盛の動物園へ。
- (3) おとなも子どもも、いのちに学ぶ。ヒトを育てるいきものアカデミー
- ・いのちの尊さ、やさしい心、やり遂げる喜び。
 - ・生き物を通じて、楽しみながら、生きて行く上で本当に大切なことを教えてくれる。
 - ・動物を育てるだけでなく、ヒトも育てる動物園へ。
- (4) ヒトも動物も、共に生きる仲間。いちばん動物に近づける動物園
- ・動物の生活にもっとリアルに触れることで、動物の感じていることまで見えてくる。
 - ・動物と人間は、もっと分かりあえる。
 - ・地球で生まれた同じ仲間として、共に生きていく動物園へ。

4. 天王寺動物園の顧客ターゲット

基本構想においては、2種類の顧客ターゲットを設定しています。

現在の動物園利用者の大多数は、ファミリー層を中心とした日帰り圏内の住民であり、基本構想ではこれをメインの顧客層として位置付けています。ファミリー、カップル、友人同士での来園スタイルが想定され、リピーターの確保を目指していくこととなります。

一方で、少子化が進む中、子ども中心としたファミリー層を対象としたビジネスは先行きが厳しいこともあり、伸びしろのある顧客層として、外国人を含む遠方からの観光客層を今後開拓すべきターゲットと位置付けています。

1. 魅力的な動物園に向けて ～活性化計画の基本方針～

おもしろい・あきない（飽きない）動物園となっていくために、動物園の魅力向上を進めるとともに、みんなの動物園となることを目指して、ボランティアや市民等との連携・協働による動物園の活性化を図っていきます。

<魅力的な動物園に向けての現状と課題>

動物園は、動物の生態を学び、命の大切さを伝える「学習・教育の場」である一方、希少な生きた動物を見ることができ、家族、グループで楽しい時間を過ごす「レジャーの場」でもあります。

しかしながら、他の集客施設でお客様サービスやホスピタリティの高い接遇が進む中、動物園でのサービス向上は進まず、お客様に楽しんでいただくという視点での改善の取り組みが不足していました。

<課題解決に向けた活性化の基本方針>

来園者にとって魅力的な動物園とは、多くの生きた動物を観覧するという基本に加えて、個々の動物の躍動や佇みなど特性がわかる動きを見ることができれば展示の魅力がアップすることから、旭山動物園をはじめとした行動を誘発する展示手法が多くの動物園で採用されており、当園の展示、説明手法についても、魅力的なものとするための工夫をしていく必要があります。

動物展示の次に、魅力的な動物園となるために必要なことは、園内の快適な環境と満足度の高いサービスの提供です。単に目的の動物舎に向かって園路を歩くだけでなく、そこに木陰やベンチ、花壇などくつろぎの空間があり、清掃も行き届いている、楽しい時間を過ごしていただける飲食機能や物販機能が充実している、また、園内スタッフの積極的なお客様との挨拶、会話などホスピタリティ感の高い接遇が実施されているなどの点が合わさって満足度が向上することから、次に掲げる点を重視した活性化施策を実施し、満足の実感によるリピーターの獲得につなげていきます。

2. 魅力あるコンテンツの開発とその発信

2-1. メインコンテンツである動物展示の強化

動物園の使命である、「動物の魅力を発信し、楽しみながら野生動物や家畜などの動物についての理解や自然環境や生物の多様性への気づきを与える」を踏まえ、メインコンテンツである「動物展示」を格段に強化します。

■現状の課題

野生動物の減少や希少種保護の規制の強化などもあって、展示動物の確保が難しくなっています。コレクション計画に基づき、集中と選択を図りつつ、保全が必要な動物だけでなく、人気ある動物種の繁殖と導入確保に取り組む必要があります。

動物が生き活きと行動する姿はお客様の目をひくものとなりますが、現状では必ずしも動物の行動を誘発する取組みは十分とは言えません。

また、動物園においてお客様に豊かな体験をしてもらうためには、動物に関する体験・体感を演出することが必要ですが、現状では十分ではありません。

動物舎前において、飼育員による解説を行っていますが、常時解説員を配置することは難しく、動物舎前にパネルの設置も進めています、その取組みも十分ではありません。

『ZOO21計画』に基づき設置した動物舎については、老朽箇所の修繕や設備の更新を除き施設の大規模な更新は予定していませんが、このような動物舎においても、魅力向上の検討が必要です。



■活性化計画

(魅力的な動物の導入と繁殖)

- ① コレクション計画に基づいて集中と選択を図りつつ、国内外の動物園との繁殖協力を積極的に進め、計画的に人気動物の導入と繁殖に取り組みます。

(野生本来の行動を誘発する動物の展示)

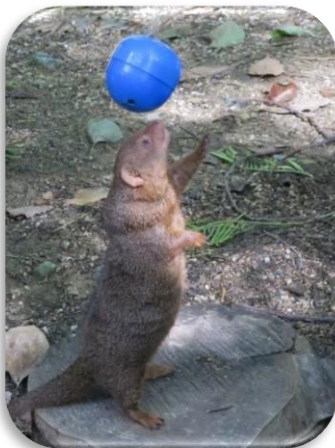
- ② 野生本来の動物の行動を魅力的に見せる展示を行います。新設する動物舎については、動物が自然に近い環境で暮らす様子を再現した従来の生態的展示の良さを残しつつ、動物の野生本来の行動を誘発し、見せることができる魅力的な展示となるよう計画します。
- ③ 既設の動物舎についても、動物の行動を引き出す工夫を盛り込むなどにより展示の魅力を高め、それをアピールしていきます。飼育動物の生活の質を高めるための工夫である「環境エンリッチメント」を全園的に推進し、その成果を行動を誘発する展示として活用します。
- ④ 動物の健康管理のための動物のトレーニング（ハズバンドアリートレーニング）を全園的に推進し、動物の特徴や習性を展示する手法としても応用します。
- ⑤ 給餌方法の工夫などにより、動物と来園者の安全を守りつつ、来園者に動物を近くに感じただけのような展示を行います。新たに設置する施設については、来園者と動物との距離感の演出に配慮したものとします。

(体験・体感活動の強化)

- ⑥ 動物とのふれあいやお客様による餌やりなどの体験・体感ができる活動を強化します。この際、野生動物が家畜や愛玩動物とは異なることについて来園者の理解を求めつつ、それぞれの動物の習性や特徴などを学びながら動物と接することができるプログラムを提供していきます。

(動物舎前での情報提供・情報発信の強化)

- ⑦ 飼育員による解説や動物舎前に掲示するパネルなどにより、積極的に動物の魅力の発信を行います。パネルについては、種名や当該種の基本的情報に関する常設パネルだけでなく、タイムリーな情報を発信できるパネルを設置して積極的にメッセージを発信します。
- ⑧ 動物解説などを行うボランティア活動を支援し、魅力発信の機会を拡大します。



■当園の現状
 ミニナガヤギの環境エンリッチメント

ふれあい広場のミニナガヤギ

国内の動物園間の繁殖協力により、26年11月に当園でホッキョクグマの赤ちゃんが生まれ、無事に生育した。公開されたその姿は来園者の人気を博した。



飼育展示の工夫として、給餌の工夫や遊具の導入など「環境エンリッチメント」の取組みを進めている。平成27(2015)年には、NPO法人市民ZOOネットワークが実施する「エンリッチメント大賞」を当園が受賞した。



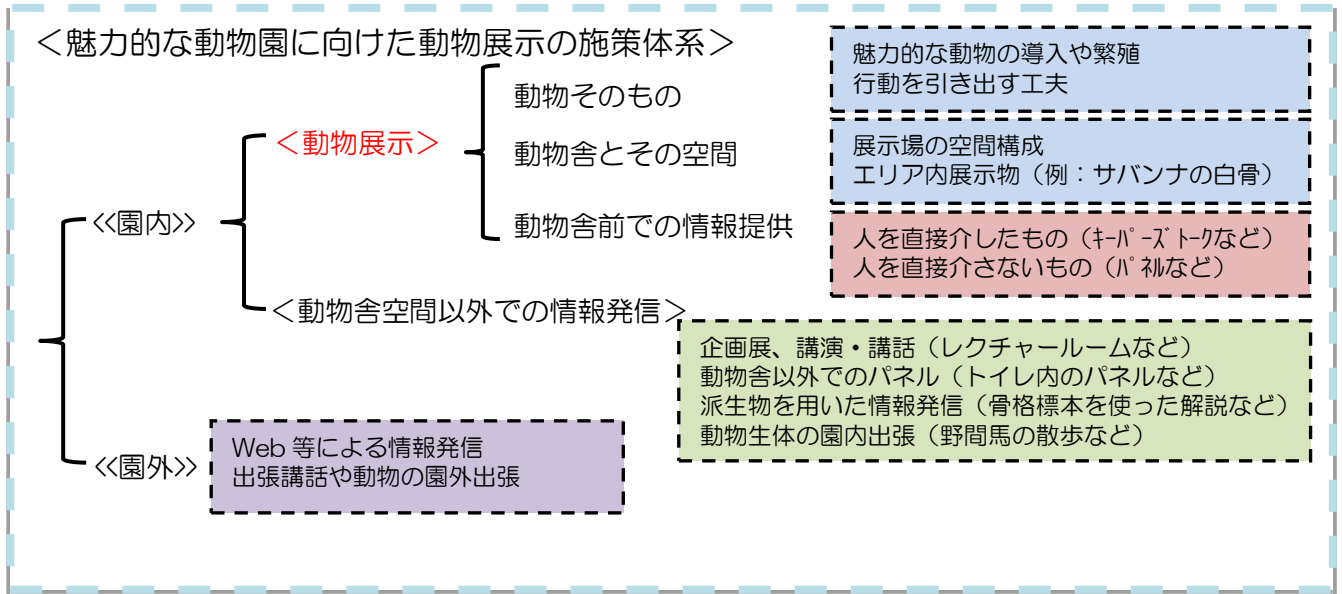
動物に対する関心呼び込むため、動物舎前のパネル掲示の工夫に取り組んでいる。



(参考) 動物園の施策体系

動物園のメインコンテンツは動物そのものであり、その維持管理に力が注がれるが、魅力的な動物園としていくためには、動物の飼育に関する工夫のみならず、動物舎とその空間のデザイン、動物舎前の情報提供も併せて総合的に魅力の向上とその発信を考えていく必要がある。

また、動物のことを伝えていくという観点からは、動物舎以外での園内の情報発信やWEBを通じた情報発信なども重要な取り組みとなる。



2. 魅力あるコンテンツの開発とその発信

2-2. 魅力的なイベント企画づくり

動物園内でより大きな賑わいを創出していくためには、単に動物を展示するのみならず、各種のイベントを企画実施していくことが必要です。飼育員による特別なガイドや特別な餌やり・ふれあい、バックヤードツアー、ワークショップ、講演会、音楽イベント、植物関連イベントなど、多様なイベントを企画実施し、発信していきます。

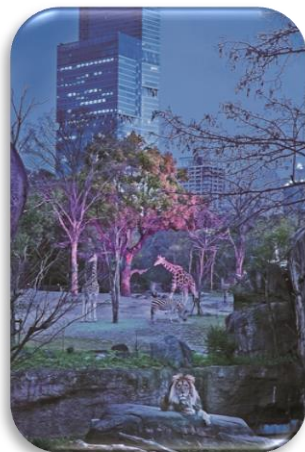
■現状の課題

イベントについては、長期のイベント開催計画が策定できておらず、場当たりのイベント実施になりがちで、園をあげてワクワク感や盛り上がり感を醸成することが不十分でした。そのため、集客と魅力伝達につながる戦略的・効果的なイベント開催にはなっていない状況です。



■活性化計画

- ① ナイト・ズーなど季節の大型イベントを企画し、その実施を定例化していきます。
- ② 賑わいの創出、動物の魅力の発信、参加者の学びなどにつながる様々なミニイベントの企画開発を行い、実施します。
- ③ イベントの実施に当たっては、職員による実施のみならず、市民、ボランティア、NPO、地元企業などとの協働を積極的に進めて、多くの人達に支えていただくイベント運営を目指します。
- ④ 数年先を見越して、歳時記と連動した年間イベント計画を策定します。
- ⑤ 個別のスポンサーイベントも積極的に推進します。



平成 27(2015)年 夏のナイトZOO

2. 魅力あるコンテンツの開発とその発信

2-3. 広報・プロモーション

広報・プロモーションは、園内でのコンテンツや企画をいかにメディア・パブリシティに繋げていくかというネットワークと機動力が重要な要素となります。

現状の広報ネットワークを更に広げ、大小様々なWEB等のメディアとの連携やイベント企画と連動しながら広報の仕組み、プロモーション企画を推進し、より情報発信力を高めていきます。

■現状の課題

広報、プロモーションについては、広告宣伝費がない環境の下、プレスリリースやホームページを通じた情報発信を中心に実施していますが、戦略的な発信とはなっておらず、情報発信力が不足しています。また、各種の事業の企画運営に広報の観点が入り込まれておらず、これも情報発信力が不足する一因になっています。



■活性化計画

- ① 動物園ホームページをリニューアルし、来園者への好印象なイメージ訴求や園のブランド価値化を進めるとともに、全ての情報発信の基本ツールとして活用します。スタッフブログなどのSNSを通じたタイムリーな情報発信を強化します。また、新たなウェブ媒体の活用にも積極的に取り組みます。
- ② 各種メディアからの取材、番組企画、ロケーションについては、動物に著しい影響を及ぼすものや公序良俗に反するものを除き、積極的に受け入れていきます。
- ③ 当園からの情報発信が各種のメディアにリーチするよう、現状の広報ネットワークの拡大に取り組みます。
- ④ 近郊エリアの商業施設等外部と連携によるイベントのルーティン化を進めます。
- ⑤ 他の動物園との広報連携や、内外の動物関連組織との連携による広報の強化を進めます。
- ⑥ スター候補となる動物について、戦略的かつ積極的なプロモーションを進めます。



天王寺動物園 facebook



スター動物のプロモーション事例（イケメンゴリラ“シャバーニ”とオリジナルグッズの展開；名古屋市立東山動物園）

3. 顧客視点からの魅力向上策の展開

3-1. ワクワク感を持った空間の提供

動物園の来園者にワクワク感を持っていただくためには、非日常空間の演出、楽しさを醸し出すような情報発信を意図的に行っていく必要があります。
空間演出と賑わいづくりの視点で活性化を図っていきます。

■現状の課題

これまで、施設全体の祝祭性や非日常空間の演出が足りず、集客施設として期待感の醸成が足りない施設となっていました。また、他園と比較しても緑が少なく、エントランスにおいてワクワク感を醸成する仕掛けも十分ではありませんでした。

また、清掃をはじめ園内の美観に対する取組が徹底されてきませんでした。



■活性化計画

- ① 展示動物が生息している自然景観を想起させる植樹・緑化を促進し、植栽の適切な維持管理を行って、園内全体を緑溢れる空間にします。
- ② 動物園ゲートに、季節に合わせた装飾や花壇の設置、記念撮影場所の設置、動物関連情報のタイムリーな提供など、来園者のワクワク感を醸成する仕掛けを満載します。ゲートでの来園者への情報提供においては、ICTや動画も活用して楽しい情報提供を行います。
- ③ 整備計画においては、動物園の出口付近に売店を配置するなど、動物園の余韻を楽しめるような仕掛けを盛り込みます。
- ④ 清掃活動に力を入れ、ゴミの落ちていない園路、清潔なトイレ、汚れのないベンチや掲示物など、きれいへの取組を強化します。
- ⑤ 園内の美装化に取り組みます。
- ⑥ 最寄り駅から動物園までのアプローチが快適でワクワク感のある歩行者空間となるよう取り組みます。



平成 27 年 10 月にリニューアルしたてんしばゲート



園内美装化作業

3. 顧客視点からの魅力向上策の展開

3-2. 来園者の快適さの向上

来園者サービスを提供する施設として、来園者の高い満足度を実現するためには、快適に過ごせる園内環境を提供していく必要があります。動物園を訪れる様々な来園者に対して、できるだけバリアの少ない「ユニバーサルな動物園」を目指します。

■現状の課題

園路は凹凸が多く、ベビーカーや車いすの利用者には回りにくい状態が続いています。また、動物園は屋外施設であるため、夏季や冬季、雨天といった天候の悪いときにサービスが極端に低下するという問題を抱えています。また、園内をどう巡回したらかわからないという声も多く見られています。

動物園のゲートでしか入園チケットを購入できないため、繁忙期にはチケット購入のための列ができ、入園のお客様を待たせる状況が発生しています。



■活性化計画

- ① 整備計画のゾーニングの作成に当たっては、園内の回遊性に配慮したデザインとします。また、園内各所に休憩できる場所を整備するとともに、屋根付きの休憩室を整備します。
- ② 車いすやベビーカー、キャリーバッグ持参の旅行者にも優しい凹凸の少ない園内とするため、計画的に園路の補修を進めます。
- ③ 園内のトイレについては、顧客満足度の重要な要素となり得るものであり、洋式の清潔感のあるものへと計画的に改修を進めます。
- ④ 子どもや車いす利用者の目線からでも動物を楽しめるよう、ガラス面での観覧箇所の設置など必要な改修を行います。
- ⑤ 初めての来園者でも容易に巡回できるよう、園内の案内板を整備するとともに、滞在時間に合わせたわかりやすい巡回コースを設定します。また、雨天時にも来園者に楽しんでいただける巡回コースを設定します。
- ⑥ ベビーカーの貸出やコインロッカーについては、来園者の利便を考慮して、より快適に楽しんでいただくためのサービス配置の見直しを進めます。併せて、来園者視点でのゲート機能（案内、改札、物販、コインロッカー、車椅子、傘貸出等）を強化します。
- ⑦ 来園者が待ち時間なく入園できるように、入園チケット販売チャネル拡大を図り、コンビニエンスストアでの販売を実施します。

3. 顧客視点からの魅力向上策の展開

3-3. 魅力的な飲食物販サービス

飲食・物販機能は、天王寺動物園の魅力向上において重要な課題です。サービス、ホスピタリティ、賑わい醸成において必須の機能であり、来園者のリピート率にも影響してきます。このため、魅力的な飲食・物販サービスの提供を進めます。

■現状の課題

現状の飲食・物販施設は、昔ながらの施設であり、動物園の魅力向上につながるコンテンツとはなっていません。アンケート結果からもサービスという視点で不足する要素が多く見受けられます。

提供している飲食メニュー等も改善の余地があり、物販におけるオリジナルグッズも他園に比べると少ない状況にあります。



■活性化計画

- ① 来園者のニーズを踏まえて、民間の活力も導入しつつ、飲食・物販施設のリニューアルを進めます。飲食・物販施設の場所については、開園時間以外でも利用できる場所や動物園ゲート付近への再配置も検討します。
- ② 飲食サービスとしては、てんしばや新世界などの動物園周辺で提供されるサービスも考慮した上で、動物園内で提供するサービスの規模と内容を適切に設定し、来園者目線に立ったサービス（冷暖房機能、ゆったりと食事を楽しめる空間など）の提供を目指します。
- ③ 物販サービスとしては、オリジナルグッズの開発・販売を積極的に進めるなど、ミュージアムショップとして動物園のブランド価値の向上に資するサービスの提供を目指します。オリジナルグッズについては、ブランドイメージの統一を図るとともに、動物園スタッフとの協議や民間企業や市民との協働を行いつつ、話題性のあるヒット商品の開発を進めます。



昔ながらの売店



協働事業で製作したトララーメン

3. 顧客視点からの魅力向上策の展開

3-4. 何度も来場できる仕掛け（パスポート）

基本構想では、顧客のメインターゲットをファミリー層を中心とした日帰り圏内の住民と位置づけ、ターゲットに対する戦略をリピーターの確保として位置付けています。また、動物園の将来像として、何度も来たくなる「みんなの動物公園」を目指すこととしています。このため、熱心なリピーターを確保する施策として、年間パスポートを導入します。

■現状の課題

年間パスポートは数多くの動物園水族館で導入されており、当園の来園者アンケート等でも多くの方より要望いただいています。しかし、これまで天王寺動物園ではこのサービスが提供できていませんでした。



■活性化計画

リピーターを確保し、多くの市民に「私たちの動物園」と思っただくため、年間パスポートを導入します。導入に当たっては、現行のサポーター制度等の改編も併せて進めます。

■参考となる他園・他館事例

○上野動物園（東京都立）

年間パスの価格は、高校生以上 2,400 円。65 歳以上の年間パスは 1,200 円と通常の半額。

通常の入園料は 600 円。

○横浜動物園ズーラシア及び金沢動物園（ともに横浜市立）

年間パスの価格は、18 歳以上 2,000 円。

通常の入園料はズーラシア 800 円、金沢 500 円。

交通系 IC カードに対応しており、これは国内の動物園では初めての取組。

○旭山動物園（北海道旭川市立）

年間パスの価格は、高校生以上 1000 円。

通常の入園料は通常料金が高校生以上 820 円、旭川市民は 590 円。

3. 顧客視点からの魅力向上策の展開

3-5. CS（顧客満足度）向上のための改善活動の推進

来園者にまた来たいと思って頂くためには、スタッフの接遇、笑顔あふれる雰囲気作りが重要です。

全スタッフが、親切で丁寧な対応、スタッフから話しかけていく姿勢など来園者に動物園を楽しんでいただくためにできることを第一に考える職員体制を構築します。

■現状の課題

天王寺動物園は、市直営の施設であり、これまでサービス・接客という視点が疎かになりがちでした。接遇改善に関しては、平成 26(2014)年から研修を開始したところであり、その定着が課題となっています。また、職員のみならず、委託先等（出改札、売店、警備、清掃など）スタッフも含めた接遇の向上が課題です。

また、顧客満足度向上の観点から、動物園の活動を継続的に改善していく仕組みの構築も課題です。



■活性化計画

- ① CS活動の推進を更に進めます。委託業務職員を含む動物園全スタッフがおもてなし意識の向上とホスピタリティの醸成に努めるよう意識改革に取り組みます。
- ② 接遇に対する定期的な研修を実施するとともに、その達成状況についてモニタリングを行い、更なる改善を進めます。
- ③ 来園者の苦情、要望を適切に判断し、スタッフ間の情報共有の促進を図るとともに、迅速に処理できる体制整備を行います。接客マニュアルを策定し、OJTを実施します。
- ④ 来園者と接する時間を確保できるようスタッフ業務の所掌区分を再考し、効率的な園運営となるように仕事内容の棚卸を実施します。スタッフ一人一人が今以上にお客様と時間を共有、コミュニケーションできる機会を創出していきます。

3. 顧客ターゲットごとの魅力向上策

3-6. 天王寺・阿倍野・新世界エリアと連動した魅力向上

動物園のみならず、動物園周辺エリア全体の賑わいを創出し、大阪市の都市の魅力を高めていく必要があります。このため、公園内の各施設や周辺エリアとの連携協力を進めます。

■現状の課題

天王寺公園内には、市立美術館、慶沢園、茶臼山といった豊かな歴史的文化的価値のある施設や史跡を有していますが、これまでは動物園と連携した公園全体の活性化は、あまり検討されてきませんでした。平成27(2015)年10月には、天王寺公園エントランスエリアに「てんしば」がオープンし、新たな賑わいを創出しています。

動物園の周辺には天王寺、阿倍野や新世界といった賑わいのあるエリアがあり、大阪府市の「都市魅力創造戦略」においては、天王寺・阿倍野地区が重点エリアとして位置付けられており、動物園も魅力創出の核となる施設として位置付けられています。

このため、動物園として、エリア全体の賑わい創出に貢献していくことが課題となっています。



■活性化計画

- ① 天王寺公園全体の賑わいづくりのため、公園内の他施設（てんしば、美術館、慶沢園など）と連携したイベント等を企画実施していきます。
- ② 動物園周辺エリアの全体の活性化を目指して、近隣の商業施設等と連携したイベントを企画実施するなど、誘客のための連携協力を進めます。また、近隣商業施設カードとの連携による入園料割引についても検討します。
- ③ 動物園のてんしばゲート付近については、ゲート機能だけでなくてんしばと連動した集客機能を持つ施設としての整備を検討します。



慶沢園とあべのハルカス

3. 顧客ターゲットごとの魅力向上策

3-7. インバウンド対応

基本構想では、顧客のメインターゲットを日帰り圏内の住民と位置付ける一方、今後開拓すべきターゲットとして、外国人を含む観光客層を挙げています。少子化の中で動物園を安定的に運営していくためにも、伸びしろのある顧客層としての外国人観光客の誘客に取り組みます。

■現状の課題

当園は、交通の便が良く、あべのハルカスや新世界といった観光集客施設にも隣接した好立地であり、近年外国人観光客の来園が著しく伸びています。国別で見れば、中国、韓国、台湾といった東アジアからの来園者が多いのが特徴です。しかし、これまでは4カ国語パンフレットを配布する以外のサービスはほとんど提供できていませんでした。



■活性化計画

- ① 英語、中国語、韓国語といった多言語に対応したホームページを整備し、外国人への情報発信を強化します。
- ② 園内での多言語による情報提供を強化します。園内の基本的な案内サインは、わかりやすいピクトを用いるとともに、文字情報については原則として多言語に対応したものとします。動物解説等のパネルについても、多言語に対応したものを増やしていきます。
- ③ 簡単な挨拶程度を多言語でできるよう、スタッフの研修を行います。
- ④ 英語、中国語、韓国語に長けたスタッフを採用し配置します。通訳や翻訳が行えるボランティアの確保にも努めます。
- ⑤ 日本産動物の展示を強化し、外国人観光客層へのアピールを行います。
- ⑥ 外国人対応の観光ツアー会社や宿泊施設との連携を進めます

4. 外部との連携・協働による動物園の活性化

4-1. ボランティア・NPOとの協働

動物園をボランティアやNPOが活動できる場にしていきます。これによって、動物園が来園者に対して提供できるサービス（動物解説やふれあい活動の補助など）の拡大・深化が可能となります。また、このような協働活動を通じて、市民とともに「私たちの動物園」を作り上げていきます。

■現状の課題

動物解説を行うボランティアグループ等が活動していますが、他園に比べるとボランティアの数も少ない現状にあります。また、野生動物の保護に関心を持つNPOなどとの連携は図れていません。



■活性化計画

- ① ボランティアとのコミュニケーション機能を担う担当を設置し、ボランティア活動が活動しやすいような支援を行います。
- ② 動物園における教育活動（動物解説、ふれあいなど）に関わるボランティアをサポートし、その活動を活性化させることにより、動物園が提供する教育サービスを拡大します。
- ③ 野生動物の保護等について動物園と理念を共有できるNPO等との連携を進めます。
- ④ 動物解説以外にも多様な形での市民参加を促し、市民が支える動物園となるよう協力関係を構築します。



zoo friends のロゴマーク



大阪動物園ボランティアズによる

ホネホネタッチコーナー

■当園の現状

○『大阪動物園ボランティアーズ』

昭和 51(1976)年より活動開始し、第 1～4 日曜日にボランティアによる獣舎前での解説や派生物を用いた解説等を実施している。平成 28 年 3 月現在 7 名で活動している。

○『zoo friends』

新たな動物園への市民参加を検討するグループとして、動物園 100 周年事業の一環として新たに創設されたグループ。市民の立場から独自の園内ガイドマップの作成などを実施するとともに、さらなる多様な市民参加のあり方を模索している。平成 28(2016)年 3 月現在 16 名で活動している。

○その他園内で定期的に活動しているボランティア

その他、平成 23(2011)年から、公園・動物園の花木・花壇の維持管理を行っている『天王寺公園・動物園花みどりボランティアクラブ』（約 30 名）が園内で定期的に活動している。

■参考となる他園・他館事例

○『東京動物園ボランティアーズ』

昭和 49(1974)年に設置された歴史ある動物園ボランティアグループ。平成 27(2015)年 3 月のボランティア数は 731 人で、園内において動物解説等を実施している。

○『京都市動物園ボランティアーズ』

昭和 55(1980)年設立。いわゆる動物とのふれあい広場である「おとぎの国」において、動物とのふれあいの補助等を行っている。

4. 外部との連携・協働による動物園の活性化

4-2. 個人からの寄付

動物園の運営に対して、企業のみならず、個人からの寄付や支援を求めていくことで、多くの市民や支援者との関係を構築し、市民に支えられる動物園運営を目指します。

■現状の課題

動物園を応援したいという多くの市民がおられるなかで、動物園側からそれを受け入れる枠組みを十分に提供できていません。また、ふるさと納税制度の利用も伸び悩んでいます。



■活性化計画

- ① 動物園の運営状況について、市民へのアピールや効果的なメッセージを展開し、「私たちの動物園」と思ってもらえるような参加意識を高めます。
- ② 市民からの物品の寄付など様々な提案を引き受ける窓口を創設します。
- ③ ふるさと納税制度を通じた動物園への支援について、広報PRを積極的に展開します。
- ④ 市民サポーターの制度について、制度利用の特典などについて、他の市民参加の仕組みや年間パスの導入検討と併せて整理・見直しを行い、より安定的に市民からの動物園支援活動を構成できる仕組みを構築します。
- ⑤ 個人に対して寄付を募るクラウドファンディング等の新たな方法を模索します。

■当園の現状

天王寺動物園へのふるさと寄付金：

- ① 自治体に寄付することで、住民税の減額など税制上の優遇を受けることができる制度。
- ② 大阪市が提供している22のメニューのひとつに「天王寺動物園の充実」がある。
- ③ 平成27(2015)年度では、約30件150万円の寄付があった。

4. 外部との連携・協働による動物園の活性化

4-3. 企業からの寄付・スポンサード

企業スポンサード及び企業メセナ活動の誘致を積極的に推進します。企業とのWin-Winの連携によって、動物園活動が更に活性化する連携手法を模索していきます。

■現状の課題

団体サポーターの制度により企業等からの寄付を受け付けてきましたが、近年その数や金額は減少傾向が続いています。また、動物や施設設備の寄付や協働事業について個別に受け付けてきましたが、より拡大を図っていく必要があります。



■活性化計画

- ① 企業からの寄付や協働事業に係る窓口を設け、企業との間でWin-Winの関係となる協力協働を積極的に推進します。
- ② 動物園からも企業等との協働事業を企画し、提案できるよう、営業企画の機能を担う体制と担当する職員の能力の強化を図ります。
- ③ 動物生体の寄付、ベンチ等の什器・備品の寄付など、多様な寄付寄贈を受け入れます。
- ④ 外周柵、動物舎外壁等における屋外広告の導入による入園料外収入の拡大を図ります。
- ⑤ スポンサーイベント、施設に対する協賛、ネーミングライツについても検討します。

1. 持続可能な動物園の機能向上に向けて～機能向上計画の基本方針～

野生動物の生息数減少や取引規制強化等により動物の入手がますます困難になりつつあります。また、地球温暖化や自然破壊など、環境や生物に対する様々な問題が顕著化しています。このような状況の下、動物園が継続的に活動していくためには、適切な飼育管理や繁殖への取組みを通じて飼育動物を安定的に維持するとともに、飼育動物やそれを取り巻く環境を広く伝えるための教育普及活動を推進することが求められています。また、飼育動物の維持や教育普及活動に必要な情報を得るための調査研究を行うことも求められています。

これらの動物園が本来有すべき機能を向上させ、持続可能な運営を目指すとともに、大都市大阪にふさわしい、国際的にも一流と認められるような動物園となることを目指します。

<持続可能な動物園に向けての現状と課題>

動物管理機能について

平成27(2015)年5月に策定した天王寺動物園コレクション計画に基づいて飼育動物の継続的維持を図る必要がありますが、そのためには、動物の繁殖推進や他施設からの導入、対象種の飼育に必要な情報の収集や蓄積、職員の知識や技術の向上、適切な飼料や施設、飼育手法といった飼育環境の確保、国内外の関係施設との連携などが求められます。

しかし、連携の強化、情報の収集や蓄積、職員の専門性向上などを図るための機会や時間の不足、動物そのものや飼料、医薬品等の入手に求められる柔軟かつ即時の対応が制度上困難である、収容能力・機能などが限界に達している老朽化施設がある、動物福祉への配慮が限局的であるといったように、様々な課題が存在しています。その原因としては、動物園の持つ経営資源の限界によるところが考えられますが、本市の硬直化した制度も大きく影響していると考えられます。

社会教育機能について

現在、一般来園者に対しては動物舎前でのワンポイントガイドやレクチャールームでの動物講話、年に数回の企画展などを、また学校等の団体に対してはリクエストに応じて動物舎前でのショートガイド、レクチャールームでの動物講話、園内ガイドウォーク、出張講話などを実施しています。

しかし、それぞれのプログラムは実施担当者が個々で組み立てている場合が多く、それぞれのプログラムの対象（幼児、学生、大人など）や位置づけ（環境教育、情操教育、理科教育など）も明確ではありません。また、教育普及活動の周知も十分ではなく、専門的な知識を持つ人材やプログラムを実施するための施設も不足している状況です。

調査研究機能について

これまでも、動物学や獣医学等の様々な分野において、多数の大学等研究機関との連携により、共同研究や研究事業への協力を行ってきています。

しかし、動物園において調査研究業務の位置づけが明確ではなく、専門的職員も配置されていないため、主体的な調査研究活動はほとんど行われていません。また、外部研究機関との関係においても、単発的な事業に終始し組織的な連携には至っていません。

<課題解決に向けた機能向上の基本方針>

動物管理機能を向上させます

動物園が持続可能な施設であるためには、多種多様な動物を適切に飼育すること、ならびに飼育動物を長期的に維持することが必要とされます。そのためには、動物に関する専門性を発揮することが求められます。現代の動物園には、その専門性を活かして生物多様性の保全に貢献することも必要とされています。従って、動物園の専門性の根源となる動物管理機能の向上に努めます。

社会教育機能を向上させます

動物園が社会的機能を果たすためには、楽しく学べる場であるとともに、動物や環境についての情報を発信していくことが重要です。環境教育や生涯教育といった観点での普及プログラムを充実させつつ、学校教育にも貢献できるよう事業を整理し、社会教育機能の向上に努めます。

調査研究機能を向上させます

動物を適切に管理し、教育普及活動を効果的に推進するためには、対象となる動物や分野に関する詳細な情報が必要となります。また、貴重な野生動物を飼育する社会教育施設として、研究機関に対して研究の機会を提供することも重要な役割です。従って、調査研究事業の位置づけを明確にしたうえで独自の研究能力の充実を図るとともに、様々な研究機関との連携を推進して組織的対応が可能な体制を構築することで、調査研究機能の向上に努めます。

2. 飼育管理機能の向上

2-1. 動物飼育管理技術の向上

動物園を今後とも持続的に運営していくためには、メインコンテンツである動物の飼育管理技術を高いレベルで維持することが不可欠です。このため、技術力の維持・向上に取り組めます。

■現状の課題

これまでは、動物飼育に係る情報の収集や蓄積、職員の専門性の向上を図る上で、情報や知識・技術を習得する機会や時間が十分に確保できていませんでした。特に、飼育員については、技能職という位置付けもあり、近年飼育員に求められている専門性の高さに比べて制度的なギャップが生じています。

また、近年は飼育動物に係る国際的な情報共有システムの整備が進んでいますが、当園の動物管理に十分に活用できていませんでした。



■機能向上計画

- ① 動物飼育管理を担当する職員（飼育員、獣医）が継続的に学ぶ機会を確保（国内外の各種研究会・講習会への参加。国内外の先進施設での視察・研修など）し、それぞれの動物種に応じた高度な飼育技術の獲得、向上を図ります。
- ② 組織としての技術力を維持するため、日々の飼育管理の中で得られた技術知見の蓄積を図るとともに、職員間での技術伝承を進めます。
- ③ 動物の飼育管理や展示に関する最新の技術情報を収集、保管、共有し、日常の業務に活用できる体制を構築します。また、図書の収集整理のみならず、文献情報をはじめとする各種のデータベースの導入を進めます。
- ④ 広域的な飼育動物情報システム（例：国際種情報システム機構（I S I S）が構築した動物情報管理システム（Z I M S）など）を活用して、飼育動物の個体情報や血統登録情報、飼育記録を収集し、適切な個体の管理、繁殖計画の策定に役立てます。

2. 飼育管理機能の向上

2-2. 飼育個体の維持・確保

動物園が飼育している動物の多くは絶滅に瀕した動物であり、野生からの導入は困難な状況にあります。飼育下での繁殖なしには、将来的に動物を維持していくことができません。また、当園単独での繁殖では、遺伝的多様性が確保できず限界があります。このため、動物園が展示動物の飼育を長期的かつ安定的に行っていくためには、動物園間の繁殖協力が重要になってきます。このような国内外の動向を踏まえつつ、計画的かつ戦略的な飼育動物の管理を行います。

■現状の課題

当園における飼育動物の中長期的なコレクション計画を有識者の意見も踏まえて平成27(2015)年3月に策定したところであり、国内外の動向も踏まえて、計画的に動物の繁殖や導入を進めていく必要があります。繁殖に関しては、遺伝的多様性を考慮した個体群管理を行う必要があります。国内外の動物園水族館との協力連携を深めていく必要があります。また、国際的な繁殖協力を行う上では、特に欧米の動物園が要求する飼育水準を満たす必要があります。施設の高度化も併せて実施していく必要があります。



■機能向上計画

- ① 天王寺動物園で飼育に取り組む種を選定したコレクション計画に沿った動物の確保や繁殖を進めます。
- ② コレクション計画そのものについても、当園の飼育・繁殖の状況、国内外の動向を踏まえて、適時更新を行っていきます。
- ③ 繁殖可能な個体の確保や繁殖に適した施設の整備を進めます。
- ④ 動物の導入に際して必要となる検疫について、検疫施設の確保・充実、検査実施体制の構築など高度な検疫体制を確立します。
- ⑤ 国内外の個体群管理計画（例：世界動物園水族館協会（WAZA）の国際種管理計画（GMSP）、日本動物園水族館協会（JAZA）のJAZAコレクション計画（JCP）など）に積極的に参画します。
- ⑥ いくつかの動物においては、人工繁殖技術の適用にも取り組みます。
- ⑦ 国内外の動物園コミュニティに対して、単に参画するのみならず、リーダーシップを発揮（WAZAやJAZAの役職就任、国際及び国内の血統登録担当者への就任など）することで当園への信頼を獲得し、動物園コミュニティ内でのプレゼンスを築くとともに、地域の動物園協会や個別の園館との信頼関係の構築を進めます。
- ⑧ 飼育目的や習性（例えば、群れを形成する種において、群れに適した個体数や年齢構成を確保するなど）に応じた飼育個体数の維持管理が出来るよう、適正飼育個体数を設定する。必要に応じて、ストック動物の飼育を推進します。
- ⑨ 適正飼育個体数を多少超過しても飼育できる施設等を充実させます。（バックヤード機能の充実）

2. 飼育管理機能の向上

2-3. 動物福祉の向上

野生に比べて限られた環境の中で飼育している動物園としては、飼育動物の福祉の向上に常に配慮しなくてはなりません。飼育動物が精神的、肉体的、社会的に健康な状態で生活でき、5つの自由（不快からの自由、飢えや渇きからの自由、痛みや傷病からの自由、恐怖や抑圧からの自由、自然な行動を発現する自由）が守られるような取組みを推進し、飼育動物の生活の質（QOL）を高めていけるよう努めます。

■現状の課題

動物を健康的に飼育できるよう心がけていますが、当園には古い施設も多く、飼育環境の向上についてはまだまだ改善の余地があります。環境エンリッチメントについて、一部の動物については実施を進めていますが、より多くの動物に対して実施できるよう更に拡大していく必要があります。



■機能向上計画

- ① 新たな施設については、国内外で作成されている飼育基準を活用しつつ、広さ、構造、設備などについて十分考慮し、動物、来園者、飼育員にとって安全かつ快適な飼育施設を確保していきます。
- ② 既存の施設についても、施設の維持管理計画を策定し、適切な飼育環境を確保していきます。
- ③ 高齢個体がより健康的に過ごせるよう、高齢個体の管理方法を検討し、充実させていきます。
- ④ 当園としての動物倫理規定を策定します。
- ⑤ 環境エンリッチメントの実践について、さらに拡充していきます。
- ⑥ より適切な飼育管理が行えるよう、ハズバンドアリーントレーニングの実践・拡充を進めていきます。



ホッキョクグマのおもちゃ



クロサイの無麻酔採血

2. 飼育管理機能の向上

2-4. 生物多様性の保全

野生動物の生息地の破壊や地球温暖化などにより絶滅の危機に瀕する動物種が増加する中、動物園の社会的役割として、生物多様性の保全への貢献が求められています。野生動物の飼育に関する専門性を活かして、生息域外及び生息域内保全に協力していきます。

■現状の課題

海外の先進的な動物園では、野生動物の生息域内保全への専門的な支援は当然に実施すべきこととされ、各園とも積極的に行っていますが、当園ではそのような取組は実践できていません。生息域外（飼育下）保全については、国内の先進的な動物園は環境省等の協力により実践を進めていますが、当園から十分な貢献ができていません。



■機能向上計画

- ① 他の組織や施設との連携の下、専門性を活かして、当園において希少野生動物種を増殖し、維持管理することで、野生個体群のバックアップや普及啓発事業に利用できる個体の確保を進めます。
- ② アジアゾウなど絶滅が危惧される希少野生動物に対する生息域外保全の取組を進めます。
- ③ 国内外の各種団体が進める生息域内保全に対する技術的、人的な支援を進めます。
- ④ 大阪市立自然史博物館などが行っている調査等に協力し、大阪近隣地域における野生動物生息状況を把握するとともに、必要に応じて、収集した情報を教育活動等にフィードバックしていきます。

■他園の事例

【ツシマヤマネコ保護増殖事業計画（H26.12.9から）】

JAZAが環境省と「生物多様性保全の推進に関する基本協定」を締結し、環境省の認定を受けてツシマヤマネコ保護増殖事業が実施されている。

事業参画の動物園：福岡市動物園、東京都井の頭自然文化園、横浜市よこはま動物園、富山市ファミリーパーク、九十九島動植物園、名古屋市東山動物園、盛岡市動物園、沖縄こどもの国、京都市動物園、浜松市動物園、愛媛県立とべ動物園

【ライチョウ保護増殖事業計画（H27.5.29から）】

上記協定に基づき、環境省の認定を受けてライチョウ保護増殖事業計画が実施されている。

事業参画の動物園等：東京都恩賜上野動物園、東京都多摩動物公園、横浜市繁殖センター、富山市ファミリーパーク、いしかわ動物園、長野市茶臼山動物園、市立大町山岳博物館

3. 社会教育機能の向上

3-1. 楽しみながら学ぶ ～環境教育、命の教育～

基本構想では、動物園の使命をお客様に楽しんでいただきながら生物多様性の保全等について伝えることと位置付けており、動物園が果たすべき機能として、社会教育の機能を位置付けています。特に、動物園においては、環境教育や命の教育が重視されており、教育的な観点から来園者に対して印象深い体験を提供していきます。

■現状の課題

これまでも、動物園として様々な教育プログラムを用意してきましたが、施設上の制約や教育担当の専任職員が不在であることなどから、提供できる活動が限定的なものに留まっています。また、専門的な観点から、より効果的なプログラムの開発も課題となっています。



■機能向上計画

- ① 動物園教育の担当者を任命し、教育に係る専門家との関係構築とネットワーク化を推進します。
- ② 一貫性のある教育活動を実施していくため、当園としての教育事業のポリシーをとりまとめます。
- ③ 当園が提供する教育活動は、環境教育、命の教育を軸としつつ、科学教育や理科教育、さらにはESD（持続可能な開発のための教育）にも対応したものとします。
- ④ 教育系の大学、教員、ボランティア等との連携により、教育プログラムの開発を進めます。この際、子供を対象としたものだけでなく、大人の知的好奇心にも対応したプログラムの開発にも取り組みます。
- ⑤ 動物展示に付随する情報パネルや飼育員等による解説においては、環境教育につながる環境保全のメッセージを盛り込むなど、展示を通じた教育活動も推進します。
- ⑥ ボランティア等との協働を通じて、教育活動の実践を拡大します。
- ⑦ 動物園内に新たなレクチャールームを整備し、教育活動の推進拠点とします。
- ⑧ 動物の骨格標本や剥製等を活用した企画展示や常設展示を提供できるよう、展示室を設置します。

■当園の現状

当園では、依頼に応じて、ショートガイド、ズースクール、ガイドウォーク等のプログラムを年間で250件程度実施している。

教育活動の拠点としては、昭和59(1984)年に設置された70人規模のレクチャールームを有しているが、常設展示を行えるスペースがなく、年3回開催している企画展の会場と併用しているため、保有している剥製や骨格標本は有効に活かされていない。



■参考となる他園・他館事例

王子動物園では約2,800㎡の規模の教育展示施設を有しており、常設展示と企画展示を提供しているほか、図書や資料を閲覧することもできる。また、300人規模の多目的ホールを有し、講演会等を実施している。



常設展示室



多目的ホール

3. 社会教育機能の向上

3-2. 学校教育との連携

学校教育それぞれの学習指導要領に則った教育連携を行います。この際、学校教育の教育課程で、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」が重視されつつあることを踏まえ、児童生徒が主体的に関わり、命や自然環境に対する感性や認識を深められるような動物園ならではの体験ができるプログラムの構築を、学校ごとのニーズを汲み上げながら進めていきます。

■現状の課題

当園では、ショートガイド、動物講話、ガイドウォーク、出張講話などの教育活動を学校等の団体からの求めに応じ実施していますが、知ってほしいこと、伝えたいことを動物園から団体に働きかけ実施する活動は不十分な状況です。



■機能向上計画

- ① 学校によるアクティブ・ラーニングの場としての動物園利用を促進するため、動物園と学校との連携・対話を深め、学校側のニーズを汲み上げます。また、教員の協力を得て、児童生徒の感性や自然観を育てる体験学習プログラムを整備し、園を利活用した課外学習の機会を提供します。
- ② 動物園による出前授業など、学校や地域での教育活動を推進します。
- ③ 動物園として教員の研修に協力するとともに、教員との協働により学校で活用できるプログラムを開発し、教員の動物園利用を促します。



昭和50年から実施しているサマースクール

4. 調査研究機能の向上

4-1. 大学等の研究機関等との連携

未知の部分が多い野生動物を飼育する動物園にとって、野生動物に関する学術的な研究の進展は飼育管理の向上等に大きなメリットを生みます。しかし、研究の全てを自ら実施することは困難であり、大学等の学術的な研究機関との連携が不可欠となります。そこで、研究機関に対して、動物園をフィールドとした研究の機会を積極的に提供していきます。

■現状の課題

大学等の研究機関による動物園を活用した研究活動として、これまでは単発的な研究や検体の提供のみの協力などは実施してきましたが、組織的な連携はほとんど行われず、拡がりには欠けるものでした。また、研究機関に当園のニーズも踏まえた研究の実施を促し、Win-Winの関係を築いていくことも重要です。

■課題解決の方向性

- ① 野外では容易でない生体の観察や検体の採取など、大学等の研究機関による動物園の活用機会の提供に積極的に取り組みます。
- ② 研究者が気軽に動物園にアプローチできるよう、連携の手続きや保存検体に関する情報などを広く発信します。この際、当園としての研究ニーズも併せて公開し、呼びかけます。
- ③ 一部の研究機関との間には、機関間の協力協定を締結し、組織的かつ継続的に幅広い分野で調査研究が実施できる体制の確立を目指します。
- ④ 研究成果は動物園にフィードバックしていただき、可能なものは動物園の改善に活かします。また、一部のもの園内のパネルなどで来園者にも発信します。
- ⑤ 多様な検体を必要な時に必要な研究機関に対して提供できるよう、組織検体などについて検体バンクの構築を目指します。
- ⑥ 生物学的な研究のみならず、有数の利用者数を誇る社会教育施設として、文化や社会といった分野に関する調査研究に対しても研究機関のニーズに応じていきます。



4. 調査研究機能の向上

4-2. 動物園独自の調査研究能力の向上

動物園を適切に運営していく上では、動物園運営の向上に繋がるような分野については、動物園自身が一定レベルの調査研究能力を持つことが必要です。特に、飼育動物の繁殖についての調査研究能力の向上は急務です。

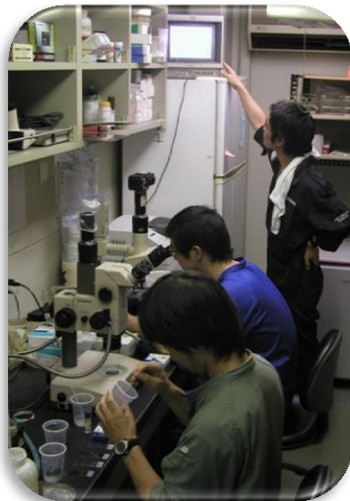
■現状の課題

近年、先進的な動物園では、繁殖研究を担う組織を設けて独自に研究を実施している例がありますが、当園においては、調査研究が業務の一環として位置づけられてこなかったため、主体的な調査研究活動がなされてきませんでした。



■機能向上計画

- ① 動物飼育、獣医療、教育普及事業などを担当する職員の業務として調査研究を位置付け、具体的な研究目標を設定した上で、日常の業務の中で必要な情報の収集・蓄積と分析・研究を行い、業務の改善に活かしていきます。
- ② 動物の繁殖については、重点的なテーマとして、園全体で取組みを進めます。将来的には保全を推進する研究センター等の組織の設置も視野に入れて、研究能力の充実を図ります。
- ③ 展示とその効果に関する研究も重点的なテーマとして、園全体で取組みを進めます。
- ④ 講習会への参加、学術機関での研修、園内での勉強会などを通じて、調査研究に関する能力向上と職員間での情報共有を進めます。また、調査研究に必要な設備・器具、備品等の確保を進めます。



■参考となる他園・他館事例

東京都の野生生物保全センターの活動

東京都は、都立の動物園・水族園（上野動物園、多摩動物公園、葛西臨海水族園、井の頭自然文化園）でのより高度な調査研究や保全活動を進めるため、多摩動物公園内に「野生生物保全センター」を設置しています。このセンターは、各動物園・水族園と緊密に連携しつつ「生息域外保全の推進」、「バイオテクノロジーの応用」、「生息域内保全への貢献」を3つの柱に据えて活動しています。具体的には、主にDNAの解析や、配偶子の凍結保存、性ホルモン分析などのバイオテクノロジー技術を希少動物の保全に役立てています。

横浜市繁殖センターの活動

横浜市は、希少野生動物の飼育・繁殖と、種の保存に関わる調査・研究を目的として、よこはま動物園ズーラシア内に「横浜市繁殖センター」を設置しています。このセンターは、市立の3動物園（よこはま動物園ズーラシア、野毛山動物園、金沢動物園）及び大学等と連携して、主に繁殖技術確立のための性ホルモン分析や雌雄判別、遺伝的多様性の確保や交雑の防止のための遺伝子分析、遺伝資源の保存のための配偶子や細胞の液体窒素内凍結保存、配偶子を用いての人工授精といった、生物多様性の保全を目的とした研究を行っています。

(各施設ホームページ参照)

1 整備の考え方 ～「進化型生態的展示」への挑戦～

基本構想において示された“「ライブ」でこそ伝えられる動物の魅力を発信”などの《天王寺動物園としての使命》を実現するため、新たな施設整備計画を策定した上で、長期にわたる整備プロジェクトの推進を図ります。

<動物の生活の質（QOL）とお客様満足度の向上に向けた、施設整備計画に係る現状と課題>

天王寺動物園では、平成7年度に策定した『ZOO21計画』に基づき、動物と植物が一体となった生息地の自然景観の再現を試みた「爬虫類生態館アイファーマー」「カバ舎」「サイ舎」「アフリカサバンナ草食動物・肉食動物ゾーン」及び「アジアの森ゾーン」の整備を順次進めてきました。

これらの取り組みによって、動物の異常行動が発生する狭く退屈な飼育環境が改善され、動物たちにとっての生活環境の向上や、さらには動物展示を通じて学ぶ地球レベルの環境教育等、『ZOO21計画』という世界水準の試みが日本の動物園展示に新たなエポックを切り開きました。

しかしながら、新たな展示施設の整備という観点において、大型飼育施設の整備に伴うコストの増大、あるいは動物までの距離が遠い等、今後改善を図るべき課題も明らかになってきました。

また、『ZOO21計画』に基づき整備された施設と『ZOO21計画』以前の老朽化した施設とが混在する園内状況の中、近年は軸となる整備方針が不在のまま、都度々々の対処的な施設整備対応を行うに留まっていました。

このような中、古く狭い飼育施設の継続利用に伴う動物福祉面での課題、動物そのものが見えづらい檻・柵構造の課題、繁忙期における観覧動線の滞留、休憩施設の不足等、多くの課題を抱えており、今後の施設整備に当たって解決を図る必要があります。

＜課題解決に向けた施設整備の基本方針＞

本計画では、従来の生態的展示の良さを残しつつ、魅力的な展示の実現や動物福祉の向上を図るため、「動物本来の生息地環境」の中、「動物本来の活発な行動を誘発」し、給餌などに工夫を凝らして動物たちを「来園者の間近で見せる」こと、言いかえれば『ZOO21計画』において進めてきた「生態的展示」を進化させた展示（進化型生態的展示）を目指すこととします。

また、都心のど真ん中の貴重な緑環境を活用しつつ、動物たちの生息地・自然環境の再現を図ることで、「都心のオアシス」としての機能確保にも努めます

動物福祉への配慮も重要であり、動物たちが健康的で活発に暮らしていける環境を整えていくとともに、バックヤード機能の充実も必要となります。

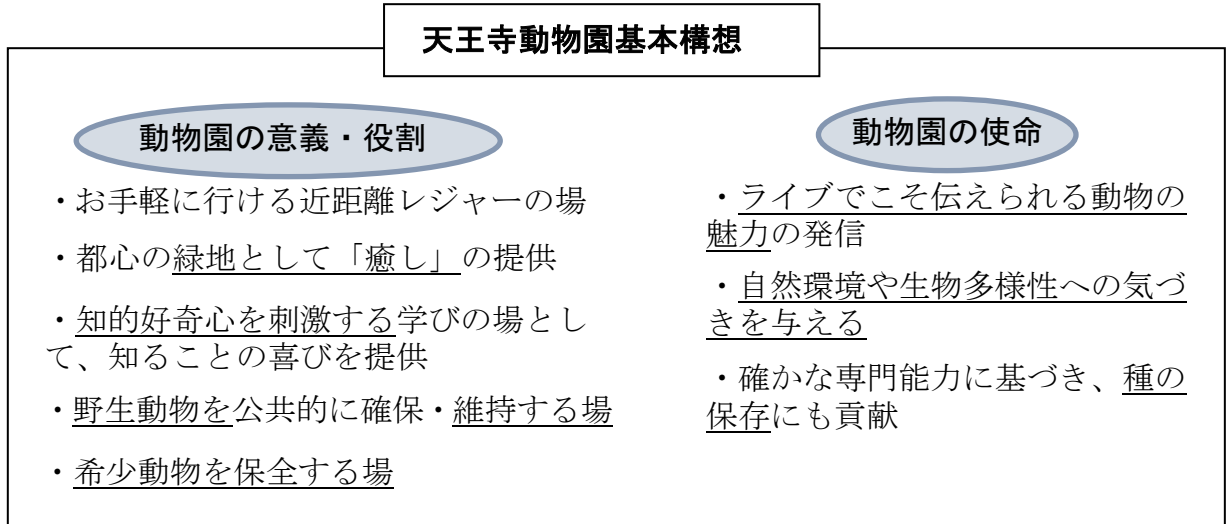
お客様目線では、繁忙期の動物イベント実施時等において、より多くのお客様に快適に見て頂ける観覧環境の整備も求められます。

整備コストについては、イニシャルコストだけでなく、ランニングコストも含めたトータルコストの低減を図っていくことも重要です。

以上を踏まえ、「動物の行動を誘発する展示環境」「動物たちが健康的で活発に暮らしていける飼育環境」「お客様にとって快適な観覧環境」「トータルコストを極力抑えた整備手法」の4点のバランスを考慮しながら施設整備計画を立案していきます。

1) 基本構想等における方針

基本構想において定められた施設整備に関連する方針は、以下のとおり。



進化型生態的展示については、「動物本来の生息地環境」、「動物本来の活発な行動を誘発」「来園者の間近で見せる」ことを目指すこととします。

2) 動物園の展示配列の視点からの整理

本計画策定にあたっては、5つの動物展示配列論をもとに、より効果的な展示のあり方についての整理を行いました。

※参考文献 Lawrence Curtis 1968 , Zoological Park Fundamentals

①<<動物の魅力をしっかり伝える動物園>>

- 使命→ライブでこそ伝えられる動物の魅力を発信
- 使命→動物についての理解を与える
- 使命→自然環境や生物の多様性への気づきを与える
- 意義役割→生きものや自然と触れ合う場
- 意義役割→知的好奇心を刺激する学びの場

②<<楽しかった、為になった、癒されたと言ってもらえる動物園>>

- 使命→楽しみを提供
- 意義役割→近距離レジャーの場
- 意義役割→癒しの場
- 意義役割→賑わいの場

(1) 系統分類学的 展示配列

(2) 動物地理学的 展示配列

(3) 生息地別 展示配列

(4) 動物行動学的テーマ

(5) 人気テーマ

※1. (1) ~ (3) は、空間計画が成立する概念

(1) 系統分類学的 展示配列

例) 霊長類 ネコ科 クマ類

(2) 動物地理学的 展示配列

例) アメリカ アフリカ アジア オセアニア

(3) 生息地別 展示配列

例) 海洋 熱帯雨林 草原 砂漠

(4) 動物行動学的テーマ

例) 遊泳 飛翔 掘削 登はん

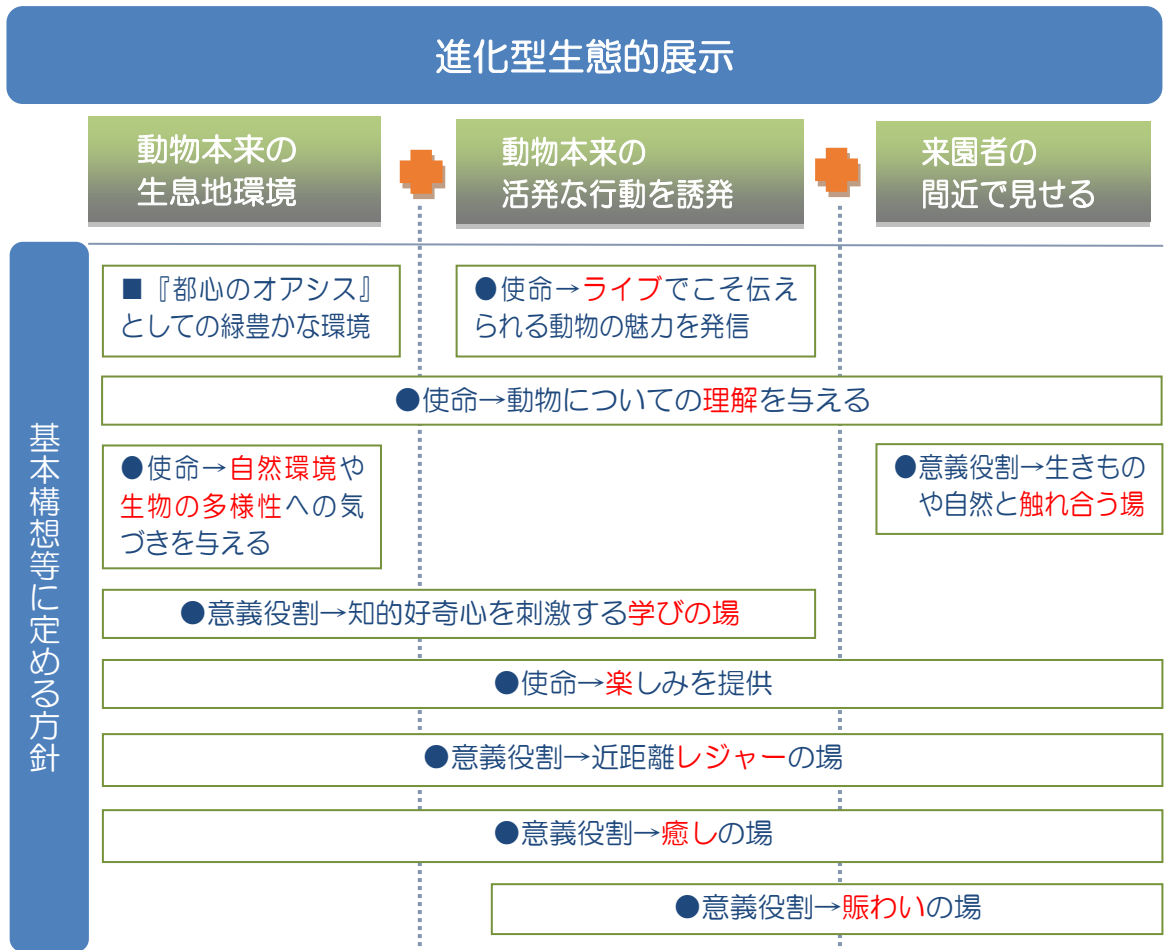
(5) 人気テーマ

※2. (4) は、空間の概念ではないので、
空間計画の全園への適用は困難

【生息地別展示配列】と【動物行動学的テーマ】をリンクさせることで、来園者の環境への気づき意識を高め、また動物にとってもより豊かな生活空間の中で暮らすことが可能となります。

3) 展示のあり方と期待される効果

進化型生態的展示と基本構想等に定める方針との関係、展示によって期待される効果を整理します。



※期待される効果は、基本的な方針をベースに一層の効果を期待

期待される効果

- ① 「生きものへの知的好奇心」や「地球環境問題の気づきや学び」において、来園者のより一層の知識の充実や満足度向上が期待される
- ② 「生物多様性」を新たな展示にしっかり組み込むことで、世界水準の動物展示環境の実現が可能となり、結果として市民にとっての動物園プライドの醸成や都市型動物園としての存在意義の向上が期待される

2 前提条件の設定

2-1 前提条件の設定

- 「天王寺動物園コレクション計画」に基づき、今後継続的に維持するとされる種を主体とした動物飼育施設として計画を行います。
- 既存で使用を継続する施設等については、出来る限りそれらの目標像の実現が可能となるよう配慮しつつ、施設の耐久性、来園者の流れや地域との関係性を鑑みながら、適宜修繕を図りつつ施設の適切な維持を図ります。



2-2 既存の継続施設等

既存で使用を継続するエリア・コーナー・施設は以下のとおりとします。

- 【爬虫類生態館アイファー】
- 【アジアの森ゾーン】
- 【アフリカサバンナゾーン】（※カバ舎、サイ舎含む）
- 【鳥の楽園】・・・施設構造を活かし、部分的なリニューアルを図ります
- 【ツル舎】・・・将来的には動物種入れ替えに伴う機能転換を許容します。

- ◆ 【てんしばゲート】
- ◆ 【映像館】・・・天王寺動物園と公園エントランスエリアとの結節点であることから、解体・利活用を含めた幅広い検討を行い、当該エリアを有効に活用します
- ◆ 【新世界ゲート】・・・施設構造を活かし、部分的な機能転換やリニューアルを図ります
- ◆ 【動物公園事務所】

3 テーマ区分及び新たな計画エリア等の設定

3-1 テーマ別区分

4つのテーマ区分（森林/草原/海洋/空中）をわかりやすく設定することで、動物の生息環境や行動へのより良い理解を、来園者に促します。



4 ゾーニング

4-1 ゾーニングに際しての4つの考え方

《1》 【生息地別展示配列】と【動物行動学的テーマ】をリンクさせた、来園者の環境への気づき意識を高め、また動物にとってもより豊かな生活空間の中で暮らすことへと繋がるゾーニングを目指します。

《2》 ゾーンや施設毎のマッチングに配慮するとともに、継続的に使用する施設やエリアとの整合性にも適宜配慮します。

《3》 天王寺動物園は、都心にありながら天王寺公園という豊かな緑環境を周囲に有する動物園であるため、すでにある自然環境をできるだけゾーンの背景に取り込み、調和を図ることとします。

《4》 将来的に導入が困難となってしまった動物種を設定していたゾーンについては、同じニッチェや概念等を基本とした新たなテーマに変更した上で、計画の変更を行うことを許容することとします。

4-2 新たな計画エリア等の設定

- ▶ 今後新たに計画するエリア・コーナー・施設については、天王寺動物園における理想的な“展示のあり方”や“期待される効果”を一層高めることを目標とします。
- ▶ なお、エリア等を構成する種目については、【生息地別展示配列】と【動物行動学的テーマ】をリンクさせたものを基本とすることで、環境に対する来園者の気づき意識を高め、また動物にとってもより豊かな生活空間の中で暮らすことへと繋げる等を目的に、レポートリーを持ったものとします。

4-3 新たに計画する施設等

A) 動物飼育に係る、今後新たに計画するエリア・コーナー・施設は、以下の設定とします

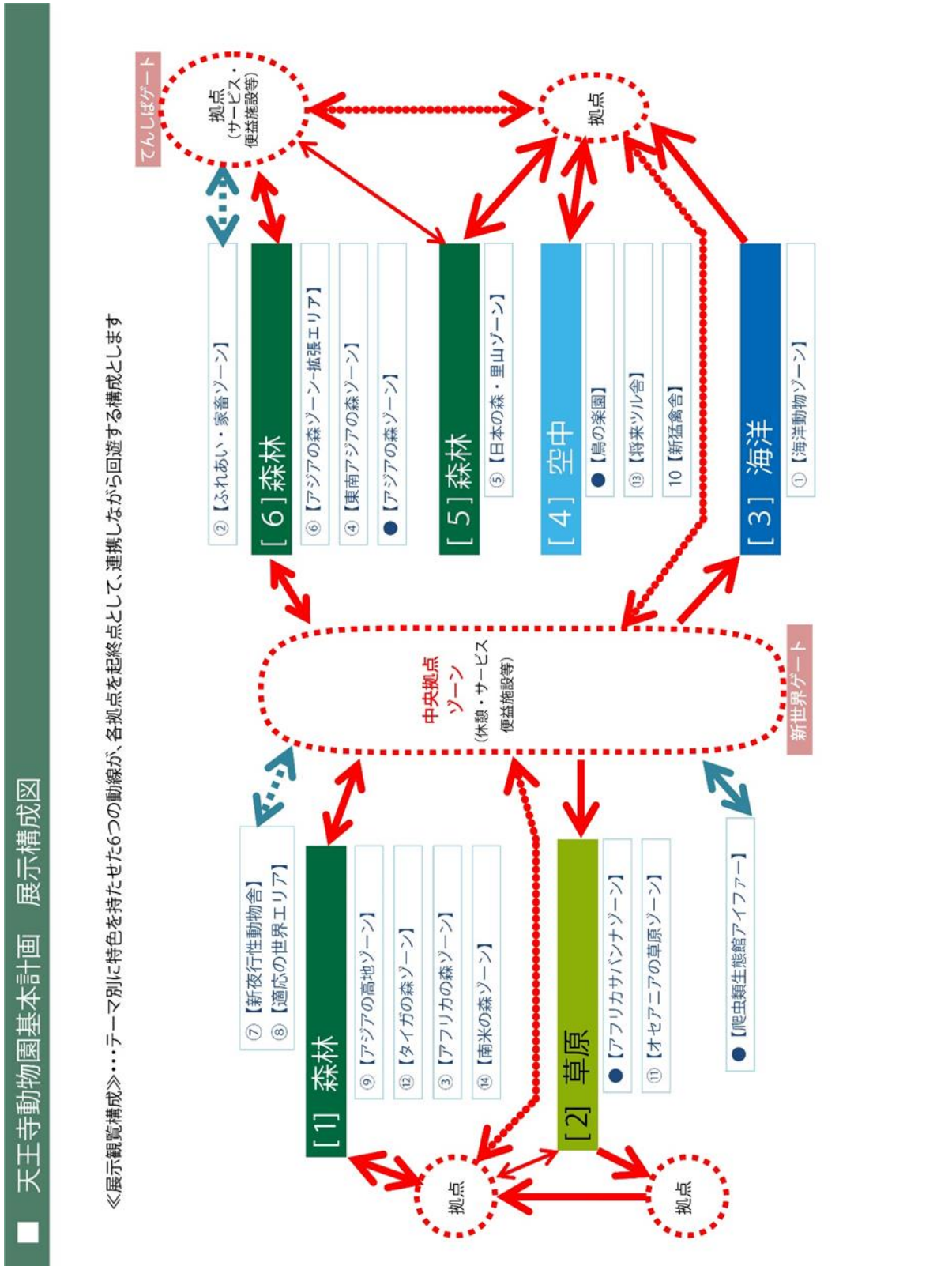
- ① 【海洋動物ゾーン】
- ② 【ふれあい・家畜ゾーン】
- ③ 【アフリカの森ゾーン】
- ④ 【東南アジアの森ゾーン】
- ⑤ 【日本の森・里山ゾーン】
- ⑥ 【アジアの森ゾーン-拡張エリア】
- ⑦ 【新夜行性動物舎】
- ⑧ 【適応の世界エリア】
- ⑨ 【アジアの高地ゾーン】
- ⑩ 【新猛禽舎】
- ⑪ 【オセアニアの草原ゾーン】
- ⑫ 【タイガの森ゾーン】
- ⑬ 【将来ツル舎】
- ⑭ 【南米の森ゾーン】
- ⑮ 【新病院・研究棟/調理場】
- ⑯ 【非公開飼育エリア】

B) サービス等に係る、今後新たに計画するエリア・コーナー・施設は、以下の設定とします

- ◆ 【動物学習施設】 (ホール、講義スペース、展示[標本等]コーナー、図書・資料スペース)
- ◆ 【スーベニアショップ】
- ◆ 【レストラン/カフェ】
- ◆ 【キオスク】 (ケータリングカー等)
- ◆ 【休憩エリア・遊具広場・雨天休憩所】
- ◆ 【総合案内所】 (案内・迷子・救護・レンタル・コインロッカー・イベント集合・ボランティア待機等)
- ◆ 【トイレ棟】
- 【バックヤード】 (作業スペース[工作・修理・洗浄等]、資材置場、倉庫、ゴミ集積所、コンポスト、作業車駐車場)
- 【バックヤード連絡通路】 (サービス動線)

4-5 展示構成図

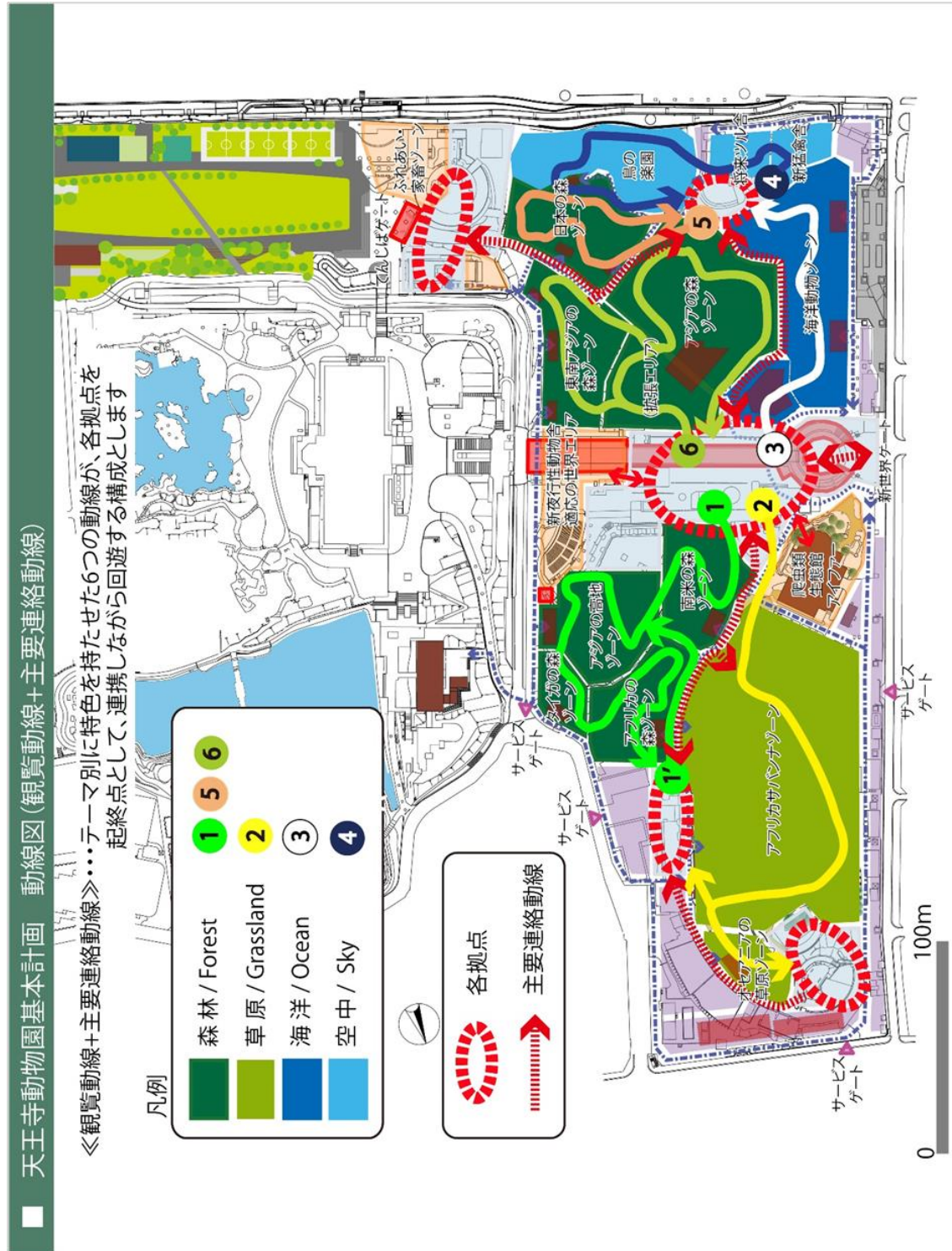
4つのテーマ別区分（森林/草原/海洋/空中）を基本とした6つのパッケージと、各拠点とをシンプルに組み合わせることを目指した、わかりやすい展示構成とします。



5 動線

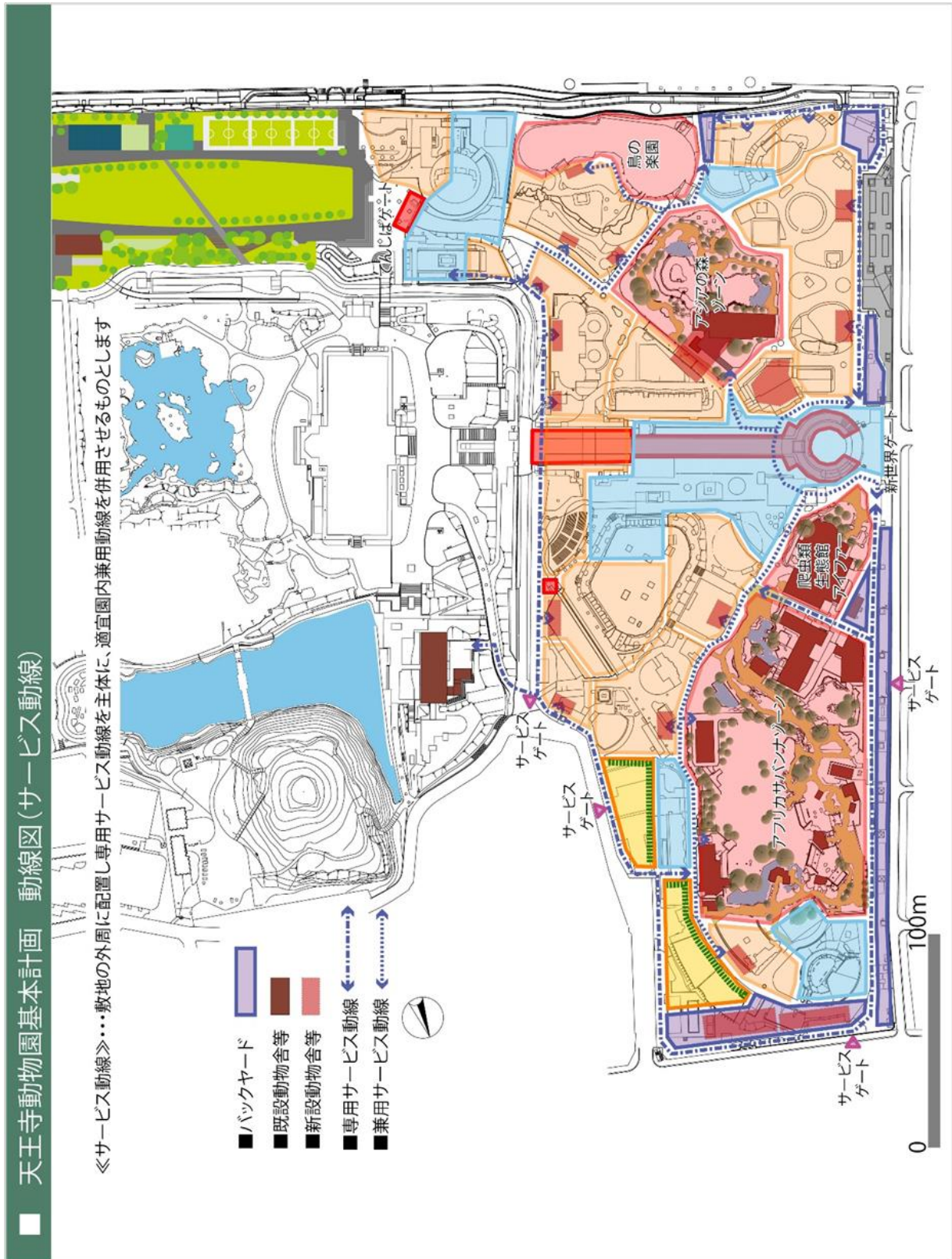
5-1 動線図（観覧動線+主要連絡動線）

テーマ別に特色を持たせた6つの観覧動線が、各拠点を起終点として、連携しながら回遊する構成とします。



5-2 動線図（サービス動線）

観覧動線との交錯をさけた、外周型スタイルを基本としつつ、補助的な園内サービス動線と組み合わせた動線構成とします。



6 新施設整備プロジェクト — 展示・空間ハイライター —

動物と展示環境の多種多様な組合せを通じて、動物園にしか語るこののできない多くのメッセージを発信するとともに、動物がその能力を発揮しつつ健康に暮らせるよう、様々な条件に配慮した 18 の新施設整備プロジェクトを設定し、既存の施設と合わせて、動物園の未来像の体現を目指します。

◎新施設整備に際して配慮すべき条件

○来園者、動物、作業者に安全で快適な施設とする

- ・国内外の動物種ごとの飼育基準を満たすことはもちろん、動物の QOL に配慮したものとする
- ・動物の繁殖に配慮した構造、設備を備える
- ・種の長期的維持のために十分な個体数、個体群の飼育が可能である
- ・動物本来の活発な行動を誘発し、展示できる
- ・動物の生態に配慮し、野生に近い暮らしを再現できる
- ・緑を多用し、都心においても快適な空間を提供できる

○エコ・フレンドリーな施設とする

- ・建設や維持管理において消費する資源、エネルギーを極力抑える
- ・維持管理において再生可能エネルギーを極力使用する
- ・建設や維持管理において排出する廃棄物、汚水等を極力抑える

◎新施設整備プロジェクトリスト

- 6- 1) ① 【海洋動物ゾーン】
- 6- 2) ② 【ふれあい・家畜ゾーン】
- 6- 3) ③ 【アフリカの森ゾーン】
- 6- 4) ④ 【東南アジアの森ゾーン】
- 6- 5) ⑤ 【日本の森・里山ゾーン】
- 6- 6) ⑥ 【アジアの森ゾーン-拡張エリア】
- 6- 7) ⑦ 【新夜行性動物舎】
- 6- 8) ⑧ 【適応の世界エリア】
- 6- 9) ⑨ 【アジアの高地ゾーン】
- 6-10) ⑩ 【新猛禽舎】
- 6-11) ⑪ 【オセアニアの草原ゾーン】
- 6-12) ⑫ 【タイガの森ゾーン】
- 6-13) ⑬ 【将来ツル舎】
- 6-14) ⑭ 【南米の森ゾーン】
- 6-15) ⑮ 【新病院・研究棟/調理場】
- 6-16) ⑯ 【非公開飼育エリア】
- 6-17) ⑰ 【てんしばゲートひろば】
- 6-18) ⑱ 【新世界ゲートひろば】

6-1) 展示・空間ハイライター①【海洋動物ゾーン】

ゾーンコンセプト：海洋動物と遭遇する「地球縦断の旅」を通じ、地球規模の海の問題を知る

■主な飼育展示動物種：ホッキョクグマ・カリフォルニアアシカ・
フンボルトペンギン

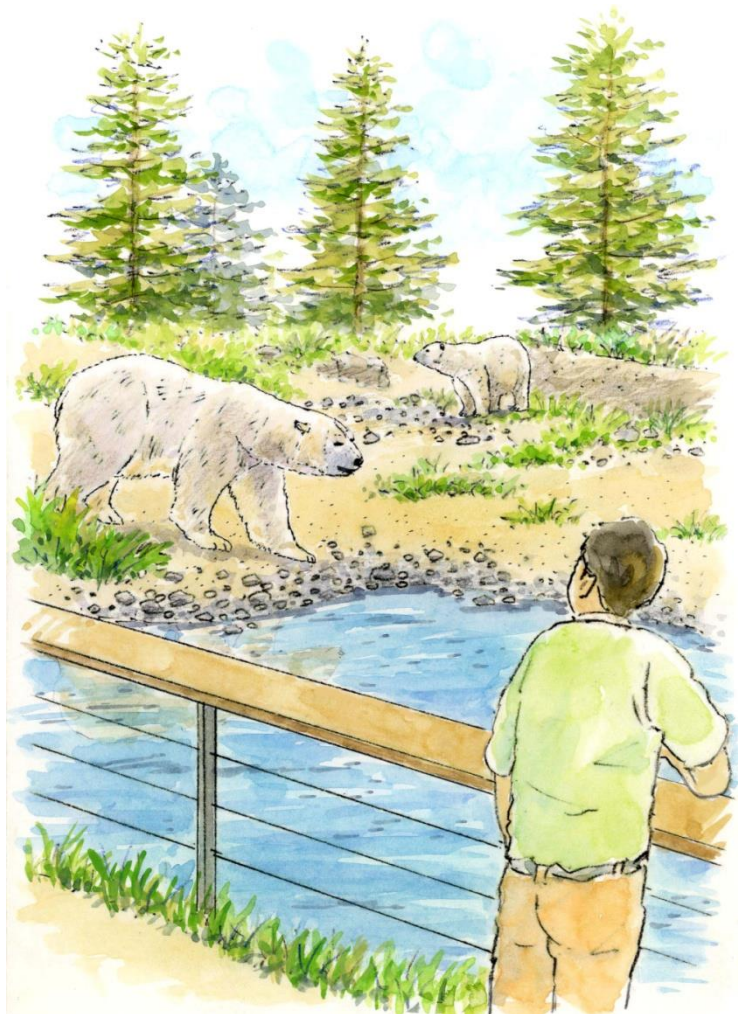
■ゾーンの主な特色

★躍動感あふれるホッキョクグマや、
アシカ・ペンギンが自在に泳ぎまわる
海洋景観が展開

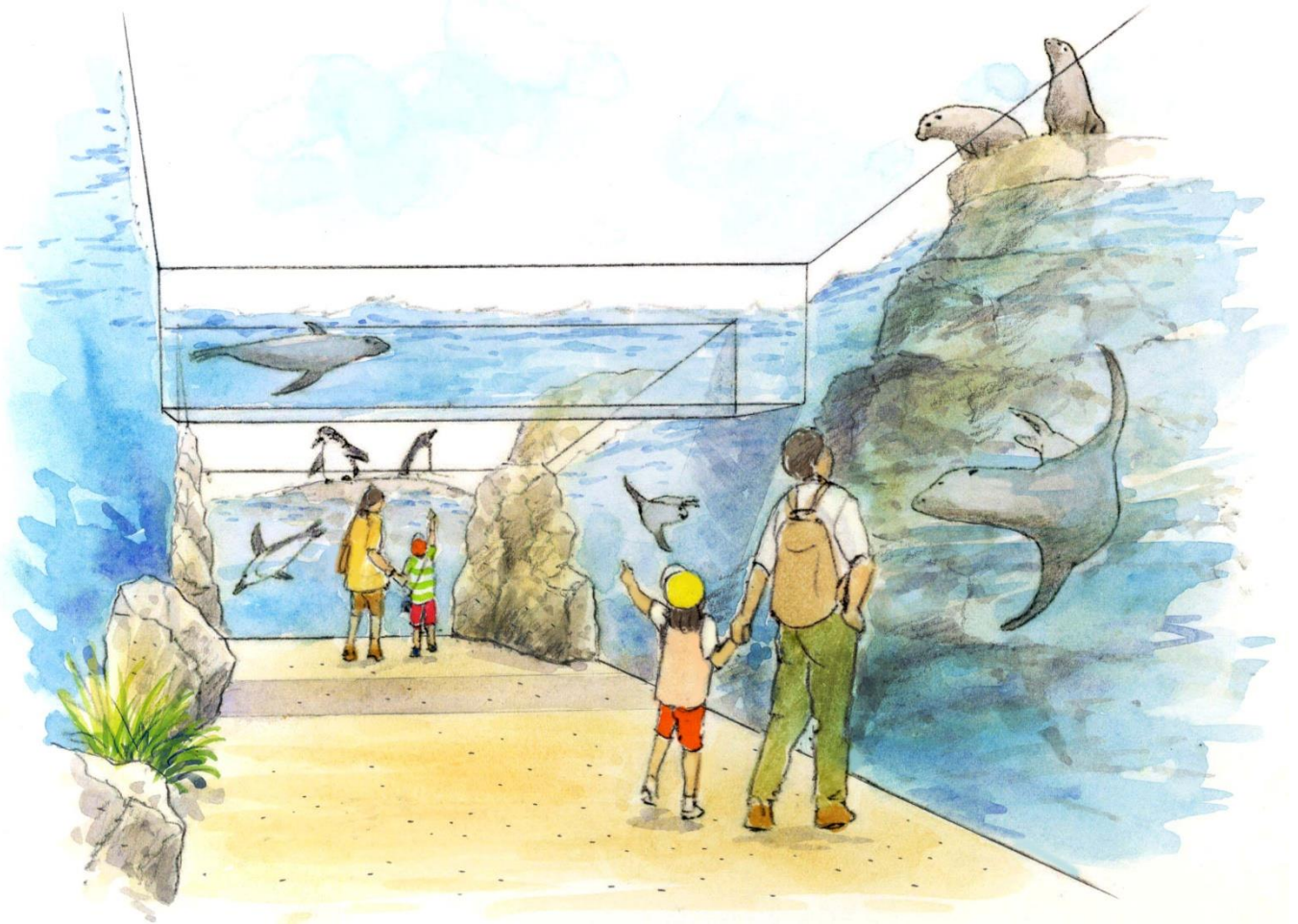


- ・アクリルを効果的に利用し、生き活きと泳ぐ動物たちの本来の姿を見せる展示を行います。また、動物たちの遊泳行動を活発化させるため、造波装置を取り入れた水環境を創出します。
- ・ペンギンの陸地エリアにウォークスルーを取り入れるなど、様々な角度から多面的に観察することができる展示環境づくりを行います。
- ・野生の海洋生物の生活環境の悪化などについて積極的に情報提供を行い、生物多様性や地球環境問題への気づきを与える展示とします。
- ・世界的な動物飼育の基準をクリアできるような飼育環境を整え、海外先進施設との繁殖協力体制の構築を目指します。

■シーンイメージ



- 豊かな陸地を悠々と闊歩する
ホッキョクグマと夏の生息地環境（上）
- ホッキョクグマの行動を誘発する水中展示のイメージ（左）



■アシカとペンギンの回遊シーンが観察可能な展示、観客の頭上を渡るアシカの通路（上）

■ペンギンの生息環境に足を踏み入れたかのようなウォークスルー（下）



6-2) 展示・空間ハイライター②【ふれあい・家畜ゾーン】

ゾーンコンセプト：人と共に生きる動物の意味と、そのあたたかさを知る

■主な飼育展示動物種：ヤギ・ヒツジ・日本産在来馬・
テンジクネズミ（モルモット）・カイウサギ



■ゾーンの主な特色

★「動物とのふれあい」によって、生命の尊さを知る

- ・人と共に生きる動物（家畜など）をより深く理解するために、農村をモチーフとした建屋を整備し、動物と暮らす生活の場を体験しながら、動物とふれあう空間を提供します。
- ・単に動物に触れるだけでなく、命の大切さや有史以来長きにわたる人と動物との関係について学ぶことができる展示を目指します。
- ・てんしばと近接した位置であることを活かして、小動物を充実させるなど、広く来園者を呼び込むことができる展示を行います。

■シーンイメージ



■古くから農耕などに用いられてきた日本産在来馬

■ヒツジ、ヤギ、テンジクネズミなどとのふれあい体験

6-3) 展示・空間ハイライト③【アフリカの森ゾーン】

ゾーンコンセプト：アフリカの自然環境で生きる、チンパンジーの高い知性を知る

■主な飼育展示動物種：チンパンジー

■ゾーンの主な特色

★群れで生きるチンパンジーの様々な行動がじっくり観察できる施設整備を行うことで、動物の知性や社会性を学ぶことのできる展示を目指す



- ・道具を用いた採食行動を引き出すなど、チンパンジーの高い知能に応じた環境エンリッチメントを提供することにより、その能力の高さを理解できる展示を行います。
- ・人に最も近く、高度な社会性を有するチンパンジーの日常生活や群れの生態を見ることのできる、ハードとソフトが連携した環境づくりを行います。

■シーンイメージ



■葉を食べるチンパンジー（上）

■チンパンジーのコミュニケーション（下）

■森に暮らすチンパンジーの様々な行動を観察

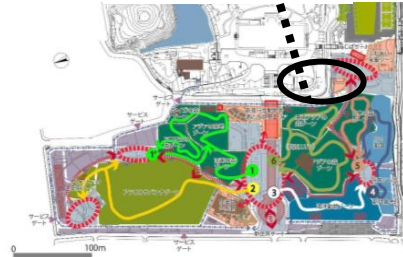
6-4) 展示・空間ハイライター④【東南アジアの森ゾーン】

ゾーンコンセプト：熱帯の森に棲む動物たちの多様性と、その身体能力の高さを知る

■主な飼育展示動物種：フクロテナガザル・シシオザル・マレーグマ・コサンケイ・ヒオドシジュケイ・ベニジュケイ ■ゾーン位置

■ゾーンの主な特色

★フクロテナガザルが、その長い手足を使い、本物の樹木をしならせながら自由自在にわたり歩く様子を観察できる、リアルでダイナミックな展示を展開



- ・東南アジアの森に棲む哺乳類や鳥類など多種多様な動物たちと遭遇し、動物たちの関係性を知るとともに、野生の生息地環境の危機も学ぶことができる展示とします。
- ・様々な環境エンリッチメントを実施し、野生本来の行動を引き出すことで、緑豊かな生息地の景観を背景とした、行動的な展示を実現します。

■シーンイメージ



- 東南アジアの森で出会う、マレーグマ（右上）
- シシオザル（右中）
- ベニジュケイ（右下）



- 本物の樹林の中で空中を自在に飛び回る、フクロテナガザルの展示イメージ（上）

6-5) 展示・空間ハイライト⑤【日本の森・里山ゾーン】

ゾーンコンセプト：大阪近郊の動物たちの暮らしを知り、身近な動物の存在を知る

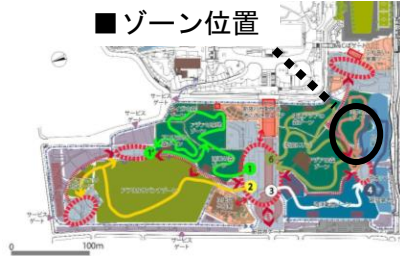
■主な飼育展示動物種：ニホンジカ・ホンドタヌキ・
ニホンイノシシ・ニホンキジ

■ゾーンの主な特色

★里山等、身近な所に生息している動物を改めて発見

- ・都市住民が触れることの少ない里山や林縁環境を再現し、大阪近郊に暮らす動物たちの存在やその動物たちと人との関係についての理解を深めます。
- ・この空間の特色である上町台地の崖線の地形や緑を活かし、動物の行動を促す生息環境づくりを行います。
- ・外国人の来園者に対して、日本の豊かな動物相と固有の動物について知る機会を提供します。
- ・造園家-小沢圭次郎（1842-1932）作庭の既存滝組やせせらぎ等の歴史遺産を活かした、日本の里の景観演出を行います。

■ゾーン位置



■シーンイメージ



■ニホンキジ

■里山を訪れた観客の目の前に現れたニホンイノシシと、その奥で草を食み、飛び跳ねるニホンジカ

6-6) 展示・空間ハイライト⑥【アジアの森ゾーン-拡張エリア】

ゾーンコンセプト：ゾウの群れでの自然な生活を、世代を超えて維持できる森

■主な飼育展示動物種：アジアゾウ

■ゾーンの主な特色

★ゾウの繁殖や環境エンリッチメントにおいて重要な「群れ」による飼育にも対応できる施設を整備

■ゾーン位置



- ・将来的な群れ飼育に対応するため、ゾウの飼育展示エリアを拡張します。
- ・飼育下のゾウのQOL（生活の質）を向上させるとともに、繁殖を推進します。
- ・隣接する「東南アジアの森」ゾーンと観覧動線を組み合わせることにより、アジア地域の動物の多様性を表現するとともに、動物を取り巻く環境問題に対する来園者の気づきを促します。

■シーンイメージ



■熱帯雨林に群れで暮らすアジアゾウの群れ

6-7) 展示・空間ハイライター⑦【新夜行性動物舎】

ゾーンコンセプト：夜の闇で生きる動物たちの住む世界へと迷い込む

■主な飼育展示動物種：エジプトルーセットオオコウモリ・齧歯類

■ゾーン位置



■ゾーンの主な特色

★夜に活発化する動物たちの世界感を、洞窟風の展示の中で、五感で体感できる環境づくりを行います。

■シーンイメージ



■薄暗い洞窟に潜むエジプトルーセットオオコウモリ等

6-8) 展示・空間ハイライター⑧【適応の世界エリア】

ゾーンコンセプト：多種多様な動物たちの、個々の生態をクローズアップ

■主な飼育展示動物種：複数種が飼育可能な動物舎、
コレクション計画から今後検討

■ゾーンの主な特色

・多種多様な動物たちに関する特徴や生態について、個別に観察し、学ぶことができる屋内型施設を中心とした展示施設として整備します。

■ゾーン位置



6-9) 展示・空間ハイライター⑨【アジアの高地ゾーン】

ゾーンコンセプト：寒冷な地域に住む動物の様々な生き方を知る

■主な飼育展示動物種：チュウゴク [タイリク] オオカミ・
レッサーパンダ

■ゾーン位置

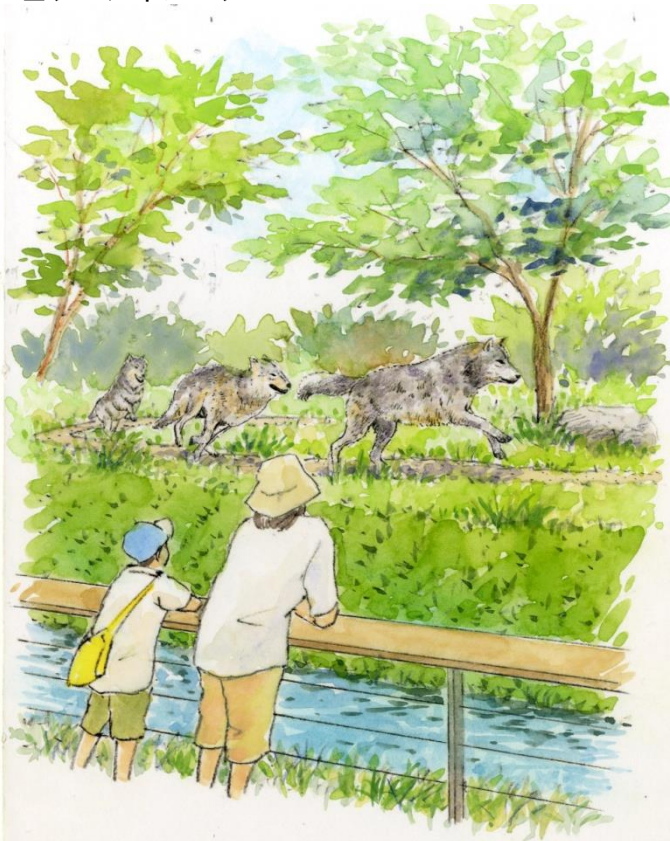


■ゾーンの主な特色

★群れで走るオオカミの迫力、樹上を走るレッサーパンダの能力等、野性動物への畏敬の念を抱かせる

- ・起伏のある森を、オオカミも来園者も共に回遊することができる空間づくりを行うことで、生き生きとした野生本来の姿が見られる空間づくりへと繋がります。
- ・かわいらしさと人気があるレッサーパンダですが、樹上での睡眠・採餌等、本来の樹上生活者としての行動を促す展示環境づくりを行います。

■シーンイメージ



▲オオカミたちの遠吠



▲樹上で暮らすレッサーパンダ

■群れで生き抜くオオカミたちの疾走

6-10) 展示・空間ハイライター⑩【新猛禽舎】

ゾーンコンセプト：森の生態系の頂点に立つ猛禽類を間近で観察

■主な飼育展示動物種：ニホンイヌワシなどの猛禽類

■ゾーン位置



■ゾーンの主な特色

★営巣や捕食（採餌）といった迫力ある猛禽の行動を、空間配置や映像技術によって間近で観察できる展示

・猛禽の迫力を感じることのできる展示にするとともに、繁殖に配慮した動物舎の環境整備を行います。

■シーンイメージ



■岩山の樹木の梢で羽を広げるニホンイヌワシ

6-11) 展示・空間ハイライト⑪【オセアニアの草原ゾーン】

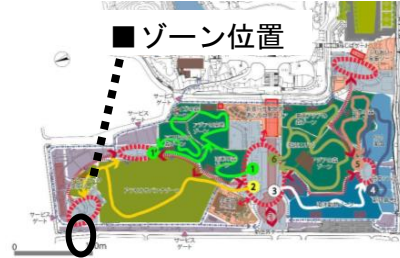
ゾーンコンセプト：独特の進化を遂げたオセアニアの動物たちの草原での暮らしを知る

■主な飼育展示動物種：カンガルー類・エミュー
インコ・オウム類

■ゾーンの主な特色

★カンガルーが、発達した足や尻尾を使いながら
飛び回る、疎林の点在する草原景観を創出

- ・ウォークスルーを取り入れ、動物をより身近に感じていただく環境を創出します。
- ・野生下では群れを成して生活するインコやオウム等の生態を知ることのできる展示を行います。



■シーンイメージ



■カラフルなインコ (左)

■カンガルーやエミュー等が暮らす草原のケージ内をウォークスルー (左)

6-12) 展示・空間ハイライト⑫【タイガの森ゾーン】

ゾーンコンセプト：極東ロシアのタイガの森の減少と保護

■主な飼育展示動物種：アムールトラ

■ゾーンの主な特色

★単独行動での縄張り空間を盛んに徘徊するトラの行動を誘発しつつ、狩りに生きる日常を学ぶ

■ゾーン位置



- ・世界最大のトラであるアムールトラの、威圧感や迫力が間近で感じられる展示を実現します。
- ・野生の生息環境に起きているトラに対する脅威や課題といった様々な課題も同時に理解できるような展示環境づくりを図ります。

■シーンイメージ



■タイガの森を悠然と闊歩するアムールトラ

6-13) 展示・空間ハイライター⑬【将来ツル舎】

ゾーンコンセプト：希少種を守る取組みを伝える

■主な飼育展示動物種：ナベヅル、ソデグロヅル、ニホンコウノトリ、タンチョウ

■ゾーンの主な特色

★希少種の保全を目的として、高い繁殖技術を活かした取り組みや、国内及び国際的な連携事業の実情を、来園者に伝える展示として整備します。

■ゾーン位置



■シーンイメージ



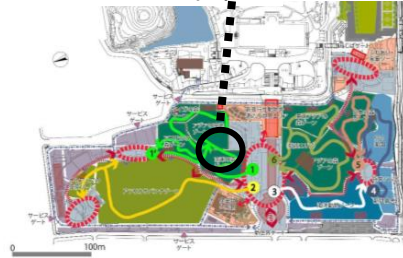
■絶滅が危惧されているナベヅル

6-14) 展示・空間ハイライト⑭【南米の森ゾーン】

ゾーンコンセプト：密林での捕食関係を学ぶことができる、南米の森づくり

■主な飼育展示動物種：ジャガー・ワタボウシパンシエ

■ゾーン位置

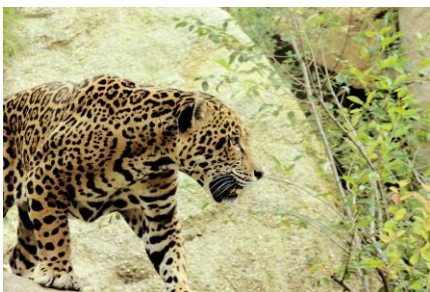


■ゾーンの主な特色

★人が踏み込みにくい密林で繰り広げられる、動物の日常生活を明らかにする

- ・迫力のあるジャガーを中心に、ワタボウシパンシエや、草食動物等（例. カピバラ）を隣接あるいは混合して展示することで、動物種間の捕食関係を学びつつ、南米の森を実感することのできる環境づくりを行います。
- ・南米の熱帯雨林における環境問題等に関する、問題提起型の展示環境づくりを進めます。
- ・新ツル舎の主構造を活かしながら、ジャガーのパドック等へと機能転換することで、無駄のない施設の転用を図ります。

■シーンイメージ



- 間近にせまるジャガー（左）、
- 密林で獲物を狙うジャガーと樹上で見つめるワタボウシパンシエ、さらに奥には捕食関係にある水辺のカピバラ（右下）

6-15) 展示・空間ハイライター⑮【新病院・研究棟/調理場】

ゾーンコンセプト：動物たちの健康な生活を保障するための、新しい病院棟・調理棟の実現

■主な飼育展示動物種： —

■ゾーンの主な特色

- ・動物を健康に維持するために必要な栄養の供給・医療の提供を、高度なレベルで実現できる施設を整備します。
- ・動物園でしかできない動物の保護・研究等の向上にも配慮し、外部連携との拡大をサポートする管理系施設を目指します。
- ・治療・研究・調理状況等が、一般来園者が部分的にでも観覧可能となる、動物園でしか実現できない開かれた施設環境整備を目指します。



《※病院棟等の課題》

- ・現病院棟は検疫や入院のための十分なスペースや設備が備わっていないため、搬入動物や傷病動物の対応が困難な状態となっています。
- ・国道側に動物病院と屋内型入院・検疫施設、国道に直接隣接しない南側に屋外型入院・検疫施設、さらには非公開飼育エリアを配置することで、防音対策に配慮します。

6-16) 展示・空間ハイライター⑯【非公開飼育エリア】

ゾーンコンセプト：動物の保全やコレクションの維持のための戦略的飼育エリア

■主な飼育展示動物種：複数種が飼育可能な動物舎、
コレクション計画から今後検討

■ゾーンの主な特色

- ・繁殖施設、一時収容施設、予備動物飼育施設、出張動物飼育施設等、展示に適さない動物種を中心に、非公開施設として適切な施設条件に配慮し整備します。



6-17) 展示・空間ハイライト⑰【てんしばゲートひろば】

拠点コンセプト：利用者満足度の向上を目指した、エントランス空間づくり

■主な施設構成：動物学習施設、スーベニアショップ、てんしばゲート（既設）、新コアラ舎

■ゾーン位置



■拠点の主な特色

★拠点施設の目玉として、ホール・講義スペース・実験室・展示による学びの空間となる「動物学習施設」を新設します。剥製や骨格標本等の展示の他に、書籍閲覧コーナー、ボランティアルーム等を整備します。

・ゲート空間と連携するスーベニアショップやカフェ等を、てんしばゲート北側に隣接して整備し、特に退園時における来園者の購買意欲に応えます。

・事業スケジュールのスムーズな進行において欠かすことのできない「コアラ舎」移転を図ります。

・ふれあい・家畜ゾーンと併せて、動物についての学びや体験・体感を提供します。



■動物の剥製、骨格標本、動物関連の書籍に囲まれた空間での、園長・獣医・飼育員・専門家等による学習会の様子

6-18) 展示・空間ハイライト⑱【新世界ゲートひろば】

拠点コンセプト：園内周遊のメイン拠点エリアとして、
利用者サービス向上とにぎわいの創出を目指した空間づくり

- 主な施設構成：レストラン/カフェ、スーベニアショップ、
総合案内所、雨天休憩所、無料遊具エリア、
新世界ゲート（既設）

■拠点の主な特色

★来園者がゆったりとくつろぐことができる冷暖房機能
を備えたレストラン/カフェ等の設置を図ります。



- ・ゲート空間と連携するスーベニアショップを新設し、特に退園時における来園者の購買意欲に応えます。
- ・総合案内所については、わかりやすく、開かれた雰囲気をもつ整備を行うことで、来園者へのCS向上を図ります。
- ・雨天時の休憩・退避利用に応える、屋根付き休憩スペースの配置を行います。
- ・子どもの無料遊具施設を、「レストラン/カフェ」に近接する場所に配置します。なお、遊具デザインは、子どもが身体を動かして動物の能力と体験できるようなものや、自然・動物・生きものの不思議等で子どもの感受性を刺激するような、動物園スタッフとの協働によるデザイン検討を図ると共に、子どもを見守る保護者のための休憩空間にも配慮します。
- ・その他、各種レンタル、コインロッカー、ボランティアルーム等、よりわかりやすく使い勝手の良い施設整備を行うことで、園内各種サービスの向上に資するリノベーションを図ります。
- ・各種施設整備に際しては、既存のペDESTリアンデッキの構造を活かしたリノベーションを主体とした整備を図ることで、建設コストの削減を目指します。



- レストランカフェの外観イメージ（上）
- 民芸品販売イメージ（中上）
- 屋根付き休憩スペースのイメージ（中下）
- 冒険心溢れる子どものあそび場（下）

7 各種便益・サービス施設 他

7-1 便所棟について

- ・目標入園者数から必要便所穴数を計算し、必要穴数を確保します。
- ・施設・設備ともに上質なデザイン的配慮を施し、来園者サービスの向上を目指します。
- ・新施設整備に併せて、便所棟の適正配置を行います。



【便所棟のイメージ】



▲標準 TYPE-8 の外観イメージ



▲キッズトイレの内部空間イメージ (左)、ユーティリティの質を向上させた女性用トイレ (右)

7-2 誘導系サインについて

1) 構成要素

- ・現在天王寺公園全体で新たに設置がされている、誘導系新サインシステムの構成要素を前提条件に、①総合案内板、②エリア案内板、③誘導案内板、④ピクト案内板の4種類からなる誘導系サインを、本計画の観覧動線計画を踏まえ、適宜配置を行います。

2) 誘導系新サインシステムの内容構成

No	種別	内容構成	備考
①	総合案内板	周辺案内図、公園案内図	※ポスタースペースは個別に併設検討を行う
②	エリア案内板	動物園案内図、動物紹介、矢印誘導	
③	誘導案内板	矢印誘導	
④	ピクト案内板	ピクトグラムによる案内誘導	

3) 具体的な配置

- ・2箇所主要ゲートについては、公園と動物園の全体配置について、来園者に俯瞰的に把握して頂くことが重要であるため、①総合案内板と②エリア案内板を同時に配置します。
- ・各ゾーンの誘導系サインについては、ゾーン毎の詳細設計時にデザインを含め検討します。

7-3 レストラン/カフェについて

- ・目標入園者数から必要な飲食席数を算出し、必要席数を確保します。
- ・想定する施設グレードとしては、中規模程度のフードコートと、小規模な飲食スペースを園内各所の休憩スペースに適宜配置し、休みたいときにいつでもくつろげる環境を整備します。
- ・動物園内だけでなく、てんしば、新世界、美術館を含めたエリア全体におけるサービス機能のバランスを考慮し、適正配置を行います。

7-4 その他

1) 計画地周辺の野生動物対応について

- ・現在「鳥の楽園」がサギの営巣地となっていたり、園内の餌を採餌対象として狙うサギがいる等、本計画地はサギのコロニーが形成されている状況にあります。
- ・また本計画に伴うこれまで以上の緑豊かな環境形成に伴い、計画地周辺に生息する様々な野生動物の進入による食害・糞害、あるいは鳥インフルエンザ等の監視伝染病発生の可能性等、園内衛生環境の悪化リスクが想定されます。
- ・よって今後の詳細設計に際しては、ゾーン毎の景観デザインのあり方、個々の展示種に対する飼育方針との整合性、さらには周囲の野生動物との共存という視点にも配慮しながら、屋外の野生動物に対する適切なバリアを用いた進入コントロール対策や、餌管理等ソフト面での対応といった対策を検討した上で、園内衛生環境の悪化リスクの低減を図ります。

2) 展示動物環境における水質のあり方について

- ・飼育水槽内での水質レベルについては、対象とする動物種やその水槽規模毎に必要な適切な水質レベルの設定を行います。
設定された水質レベルに基づき、コスト低減や維持管理面での配慮を踏まえながら、給水ろ過設備のスペックの検討を進めるものとします。

8 年次計画と総事業費

ゾーン毎に建設ローテーションを考慮し、20年間にわたる段階的な整備プロジェクトとして設定します。

	第1期 (H29~33)	第2期 (H34~38)	第3期 (H39~43)	第4期 (H44~48)	...
動物舎等	海洋動物ゾーン ふれあい・家畜ゾーン アフリカの森ゾーン		総事業費（見込） 約 85 億円 ※別途、継続使用施設の大規模改修が必要		
	東南アジアの森ゾーン 日本の森・里山ゾーン アジアの森ゾーン【拡張】				
	新夜行性動物舎 適応の世界エリア				
			アジアの高地ゾーン 新猛禽舎		
			オセアニアの草原ゾーン タイガの森ゾーン 将来ツル舎 南米の森ゾーン		
	てんしばゲートひろば （動物学習施設等）		新病院・研究棟/調理場		非公開飼育エリア
収益施設等	てんしばゲートひろば （スーベニアショップ等）		新世界ゲートひろば （総合案内所等）		
	新世界ゲートひろば （レストラン/カフェ等）				

1. 収支に係る現状と課題

(1) 収入面での現状と課題 【自主財源確保】

① 入園料収入の増加

直近の入園者数は増加傾向にありますが、収支目標である公費負担率 50%の達成のためには更なる入園料収入の増加が必須です。今後の国内の人口減少・少子高齢化を見据えると、入園者数の長期的な減少は否めません。その中で、入園者数の増加を図るには、施設リニューアルをはじめとして、イベントやPR・広報の強化等による活性化計画の確実な実施が必要です。また、インバウンド旅行者も一定割合を占めることから、周辺地域との連携等によるインバウンド増加策の実施も重要です。

また、現在の大人の入園料（500 円）は、他園と比較しても安価であり、過年度アンケートの結果も踏まえ、段階的な値上げや有料入園者の対象範囲の拡大についての検討も重要です。

◆入園料の他園比較（平成 28 年 6 月現在）

動物園名	天王寺	上野	東山	よこはま	京都市	王子	福岡市	旭山 (市外)
大人標準料金	500 円	600 円	500 円	800 円	600 円	600 円	600 円	820 円

◆過年度アンケート結果【平成 23 年 11 月 22 日・23 日実施】

＜入園料についてどのように思うか（N=362 人）＞

「概ね妥当」と感じている方が 53%で最も多く、次いで「安い」41%、「高い」6%の順であった。

② 入園料外収入の確保

動物園の魅力向上において、飲食・物販機能は非常に重要な要素のひとつです。現在、本園における園内客単価（飲食・物販）は 88 円にとどまっており、他の公立動物園と比べても大幅に低い状況です。

これは、園内でお客様の購買意欲を喚起する魅力的な物販機能が欠如していることが原因と考えられます。他園比較からは、一般的に入園料と同等額程度の園内客単価が期待できることから、当該機能の強化を通じて入園料外収入を確保し、それを自主財源として活用できる仕組みの検討も必要です。

また、企業との連携（施設協賛、イベントスポンサー、寄付等）や個人サポーターによる寄付を募る仕組みを構築し、積極的な告知展開を図る必要があります

◆園内客単価（飲食・物販）に係る他園比較

公立動物園	客単価	(参考) 民間動物園	客単価	備考
恩賜上野動物園(指定管理)	418円	アドベンチャーワールド	6,500円	入園料・遊具利用料含む
多摩動物園(指定管理)	593円	姫路セントラルパーク	825円	
天王寺動物園(直営)	88円	東武動物園	670円	

※売店・食堂等の売上高／入園者数（平成26年度実績）

積算根拠

恩賜上野動物園...東京動物園協会平成25年度決算書(飲食・物販売店の売上高÷入園者数)

多摩動物園 ...東京動物園協会平成25年度決算書(飲食・物販売店の売上高÷入園者数)

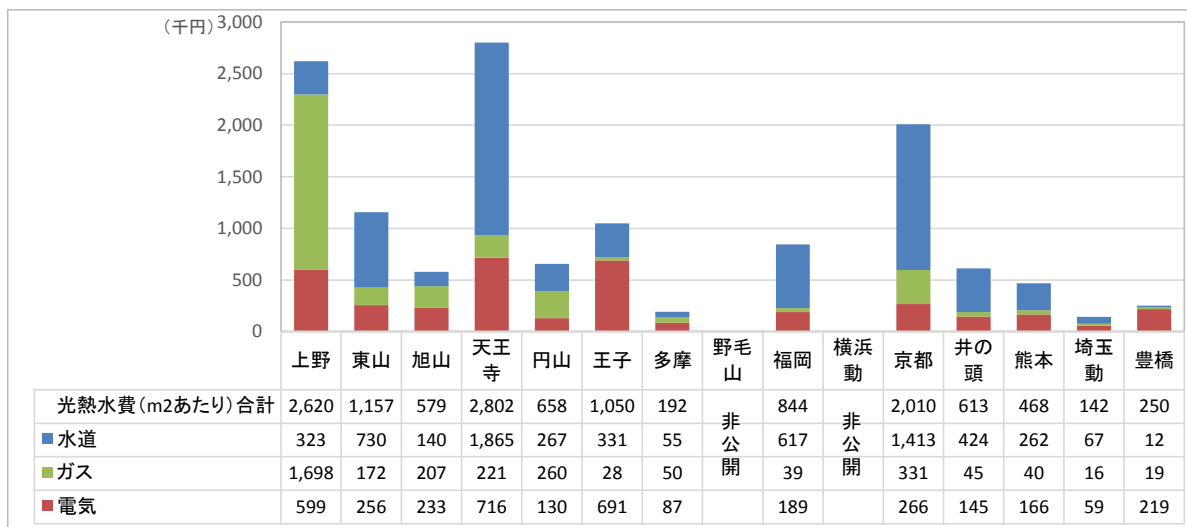
(2) 支出面での現状と課題 【支出削減】
① 人件費（総額）の削減

現在、人件費の総額は4.5～5.0億円程度で推移しています。動物園の職員は84名で構成されており、職員の平均年齢は45歳（飼育員のみでは47歳）となっており、動物園運営の硬直化が懸念されます。職員業務の機能と役割を明確にした上で、望ましい運営形態についての検討も必要です。

② 現存の施設管理費（主に光熱水費）の削減

本園の光熱水費は、公立動物園の中で最も高くなっており、それが全体に占める割合も高止まりしています。今後のリニューアル整備によって新たな光熱水費の発生も想定されることから、現存施設の光熱水費の削減を図ることが重要です。

(H29年度以降のESCO事業：爬虫類生態館（アイファー）及びカバ舎等)

(再掲) 光熱水費の他園比較


2. 計画目標達成のための対応方針（収支改善施策）

(1) 計画目標

本計画では、収支改善を推進するため、以下の2つの目標を掲げます。

<経常収支に係る2つの経営目標>

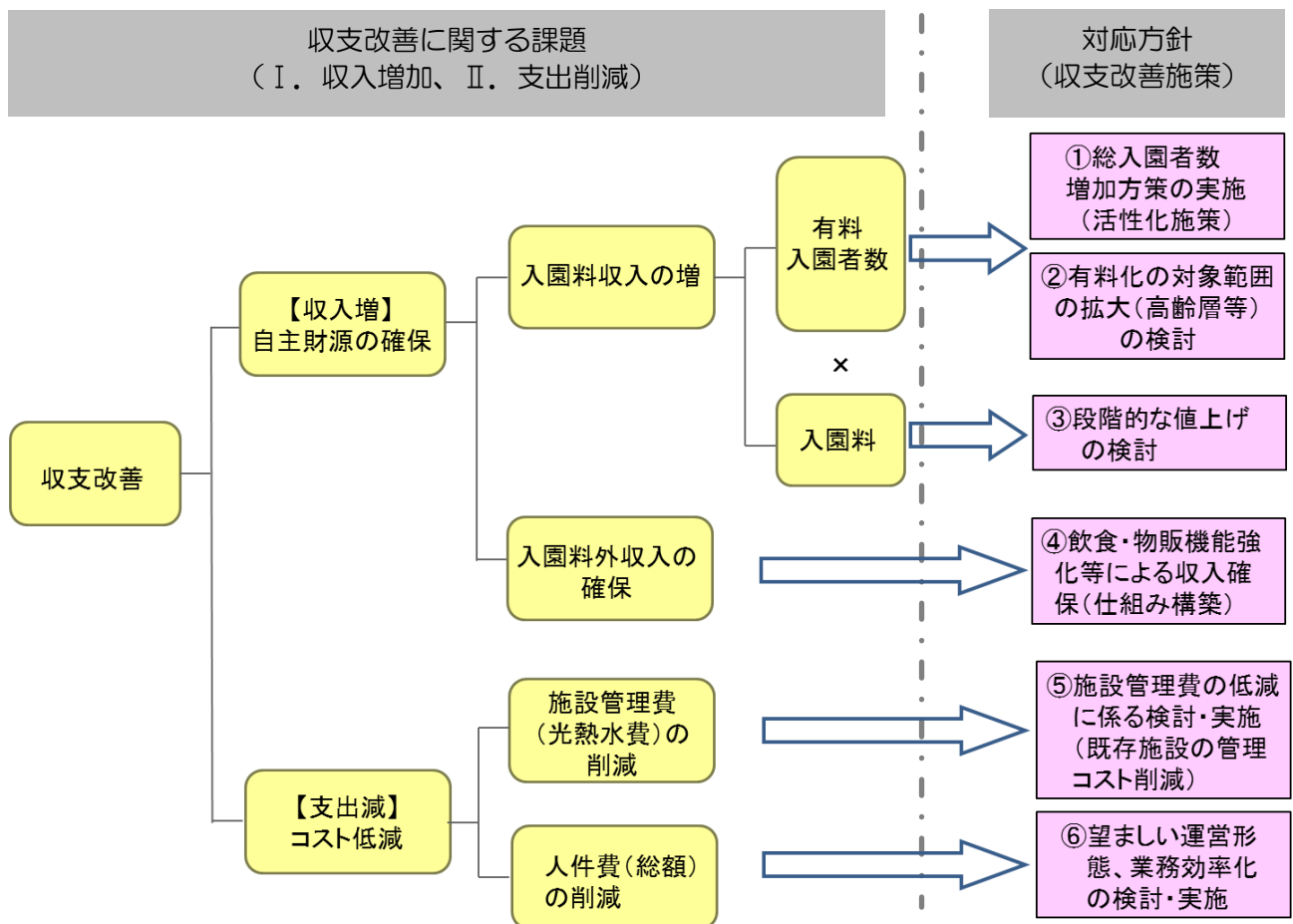
- ① サービス改善の取組みなどによって入園者数 175 万人を達成します。
- ② 運営費公費負担率（経常経費のみ）を 50% に圧縮し、さらに削減を目指します。

(2) 計画目標達成のための対応方針（収支改善施策）

前述の収支に係る現状課題を踏まえつつ、上記の2つの計画目標を達成するため、Ⅰ．収入増加への対応、Ⅱ．支出削減への対応の両面から、下記の対応方針を掲げます。

Ⅰ．収入増加への対応 ⇒ 下図 対応方針①～④（収入増加施策への展開）

Ⅱ．支出削減への対応 ⇒ 下図 対応方針⑤～⑥（支出削減施策への展開）



3. 施設整備にかかる市税負担低減について

施設整備計画において掲げた整備を着実に推進していくためには、『ZOO21計画』が停滞を招いた課題等を踏まえ、動物園自身が様々な努力を行うことによって、市税負担の低減を図っていくことが重要です。

継続的に施設リニューアルを行うことで、リピートされる来園者に対しても新たな魅力の創出・提供を続けることで、また来たいと思っただき、リニューアルと入園者数増の好循環にのせることを目指します。

(1) 施設整備費の低減

個々の動物舎等の建設にあたっては、PFIをはじめとする民間活力導入手法の検討や、使用部材のグレード等の精査を鋭意行うことで、施設整備費そのものの低減の可能性を検討していきます。

(2) 入園料外収入獲得の取組み

クラウドファンディングや動物舎へのネーミングライツ、ふるさと納税などの寄付など、入園料外収入獲得の取組みを行い、施設整備費にかかる市税負担の縮減を目指します。

4. 望ましい組織体制と経営形態

101 計画に記載した集客施設としての魅力向上、動物園を維持するための機能向上を着実に実行していくためには、それを実施し維持できる組織体制と経営形態の整備が必要です。

<組織体制の整備>

現在、出改札、清掃、警備、設備保守以外の業務はほぼ正規職員で運営実施していますが、下記の課題が挙げられ、執行体制の確保が懸念されます。動物園の全ての業務について棚卸しを実施する中で集中と選択を図り、園内組織である管理担当、動物園担当、現業管理体制の垣根を越えた効率的、機能的な業務執行体制の構築を進めた上で、必要な組織体制整備について検討していきます。

(組織体制に係る課題)

- ・動物解説の強化、ハズバンダリートレーニングの充実、植物管理などを実施する時間が確保できない。
- ・新規、拡充すべきイベント実施などで、臨機かつ柔軟な増員対応や勤務時間の変更に対応できない。
- ・強化すべき広報、イベント企画、デザイン戦略、民間企業連携、ボランティア育成などの業務は専門的なノウハウと人的つながりなど経験が必要な業務だが、人事異動により数年で担当が代わり、ノウハウと経験が蓄積されない。

<動物園に適した経営形態>

現在、動物園の管理運営は、市の直営で実施しており、市の予算、契約制度による業務執行、職員については市の人事制度による雇用、勤務体制となっているため、サービス施設の経営としては、硬直的な運営体制となっています。

これにより、動物確保などで時機を得た業務執行が困難であることや、来園者の声に迅速に対応できないこと、事業連携や入園料での民間的活性化方策提案に対応できないなど、効果的な事業実施、柔軟で効率的な運営などの面で支障があるところです。今後、本計画を実行し、動物園のさらなる活性化を進めていくためには、動物や施設、資金、人材といった限りある経営資源を確保し、効果的に活用できる仕組みの構築が必要です。これらの課題を解決するとともに、人件費などの運営コストの削減にもつながる動物園運営にふさわしい経営形態について検討を進めます。

Ⅷ 計画推進のために

1. 取組実施期間

本計画は、平成 27 年 8 月に策定した「天王寺動物園基本構想」の概念を具体化したものであり、計画内容の実行によって来園者にとって魅力的であるとともに、飼育している動物にとっても健康的で生き活きと生活することのできる動物園を目指すものです。

ここ数年、目の前の地道な改善を行ってきた結果、入園者数が増加傾向を示している現在、この状況を維持・発展させていくためには、本計画の取組内容へのスピーディな着手が必要であり、平成 31 年度までの 4 年間で各取組内容を実現すべく行動を進めることとします。ただし、施設整備に関しては、多額の財源を要するものであり、市の財政状況も踏まえた計画とする必要があるため、平成 48 年度までの 20 年間で順次施設リニューアルを進める長期計画とします。

また、本計画に記載した各取組内容を計画期間内に達成していくための「行動計画（アクションプラン）」を作成し、着実に推進、実行してまいります。

2. 弾力的な計画の運用について

本計画は、平成 27 年度時点の経営環境・運営体制をベースに今後のあるべき姿に向けた取組内容をまとめたものですが、実行にあたっては来園者ニーズや社会情勢など動物園を取り巻く状況を見極めつつ、P（計画）－D（実行）－C（評価）－A（改善）サイクルを徹底し、費用対効果等を逐次十分に検証したうえで、柔軟かつ臨機に取組んでまいります。

また、市の財政状況や民間活力の導入などの要因による取組実施期間や手法の変更についても弾力的に対応することとしつつ、動物園の使命・目的を果たせるよう努めてまいります。

3. 評価指標とチェック体制

本計画の実行を着実かつより効果的なものとするため、PDCA サイクルの一環として、市民、来園者、有識者などからその進捗状況をチェックしていただき、お客様目線でのご意見や改善提案をお受けできる仕組みを設けます。

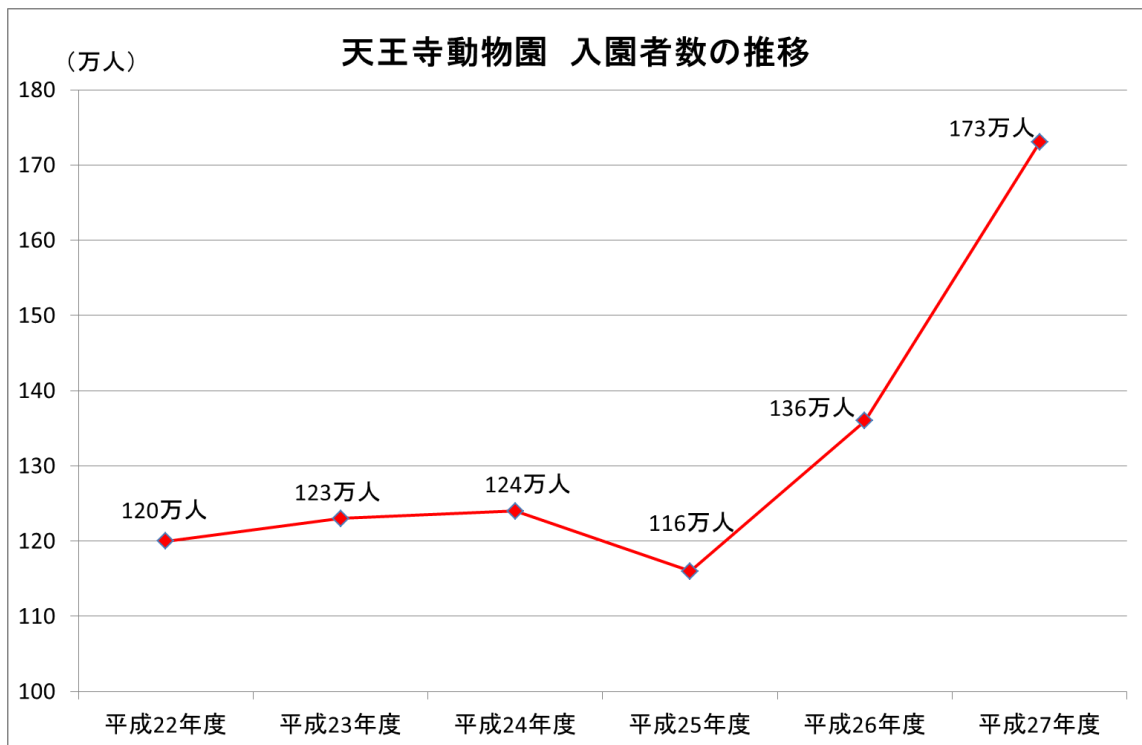
また、動物園の活動に対する来園者の評価を示す指標として、入園者数や入園料収入といった定量的なものだけでなく、来園者アンケートや市民の声など定性的な指標も含めた評価指標を開発し、きめ細かな改善活動に繋げていけるオープンな体制を構築します。

参考1 動物園の現況

1. 入園者数

(1) 入園者数の推移

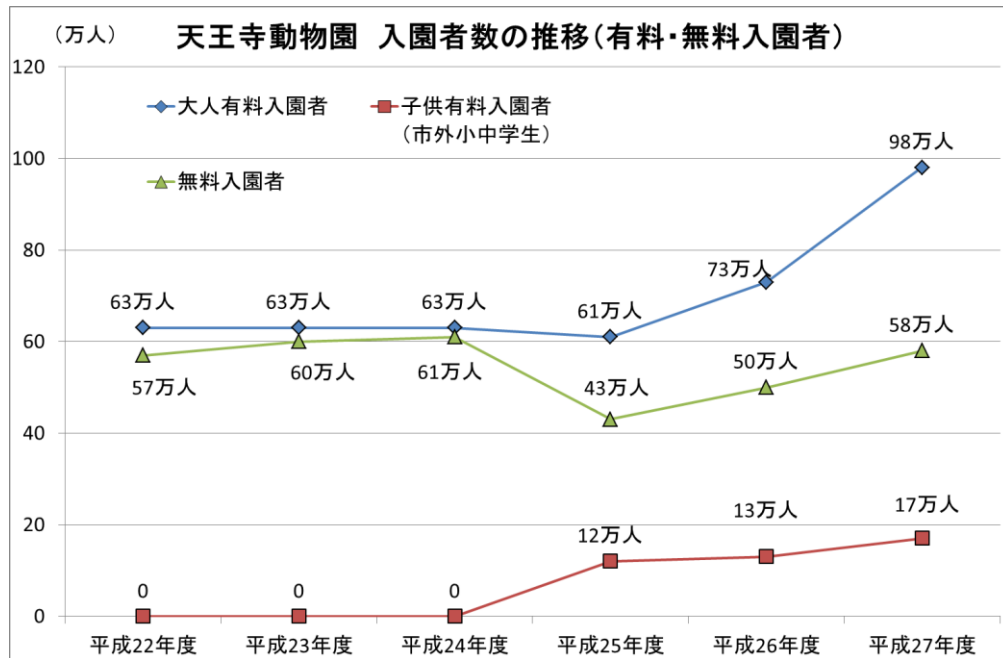
平成22年度から平成25年度までは120万人前後を推移していましたが、平成26年度より「美化、修繕、顧客目線でのサービス改善」など目の前の地道な取り組みを進めていくことで、26年度の入園者は約136万人に増加しました。平成27年度には、前年度に引き続き取り組みのほか、当園が開園してから100周年を迎えたシンボルイヤーであったため、100周年記念事業による様々なイベント効果、8月・10月・3月に行ったナイトZOO、10月に天王寺公園が「てんしば」としてリニューアルオープンした相乗効果、平成26年11月に生まれたホッキョクグマの赤ちゃん「モモ」を平成27年3月より公開を開始したことにより集客効果があり、約173万人という入園者数を記録しました。



(2) 全体入園者数における有料入園者数（大人・市外小中学生）と無料入園者数

平成25年度より大阪市外在住の小中学生の入園料を有料化（200円）したことから、無料入園者数の減少が見られましたが、近年のサービス改善などの取り組みにより、大人有料入園者・子ども有料入園者・無料入園者のいずれも増加傾向にあります。

※ 無料入園者：未就学児、大阪市内在住の小中学生、大阪市内在住の65歳以上の方、身体障がい者手帳をお持ちの方など



(3) 公立動物園の入園者数上位 15 園 (平成 27 年度)

平成 27 年度における公立動物園の入園者数は、東京都の恩賜上野動物園が最も多く、397 万人でした。続いて名古屋市・東山動物園の 258 万人となり、当園は 173 万人で、年間入園者数第三位となっています。

順位	施設名称 (設置主体・運営方式)	27 年度 入園者数	26 年度 入園者数	25 年度 入園者数
1	恩賜上野動物園 (東京都・指定管理)	397 万人	369 万人	349 万人
2	東山動物園 (名古屋市・直営)	258 万人	227 万人	223 万人
3	天王寺動物園 (大阪市・直営)	173 万人	136 万人	116 万人
4	旭山動物園 (旭山市・直営)	152 万人	165 万人	165 万人
5	王子動物園 (神戸市・直営)	125 万人	117 万人	110 万人
6	よこはま動物園 (横浜市・指定管理)	122 万人	94 万人	92 万人
7	京都市動物園 (京都市・直営)	121 万人	82 万人	81 万人
8	野毛山動物園 (横浜市・指定管理)	110 万人	101 万人	97 万人
9	多摩動物公園 (東京都・指定管理)	106 万人	104 万人	100 万人
10	円山動物園 (札幌市・直営)	98 万人	132 万人	96 万人
11	福岡市動物園 (福岡市・町営)	93 万人	99 万人	95 万人
12	井の頭自然文化園 (東京都・指定管理)	90 万人	80 万人	73 万人
13	豊橋総合動植物公園 (豊橋市・直営)	77 万人	68 万人	68 万人
14	姫路市立動物園 (姫路市・直営)	76 万人	49 万人	33 万人
15	熊本市動植物園 (熊本市・直営)	75 万人	73 万人	73 万人

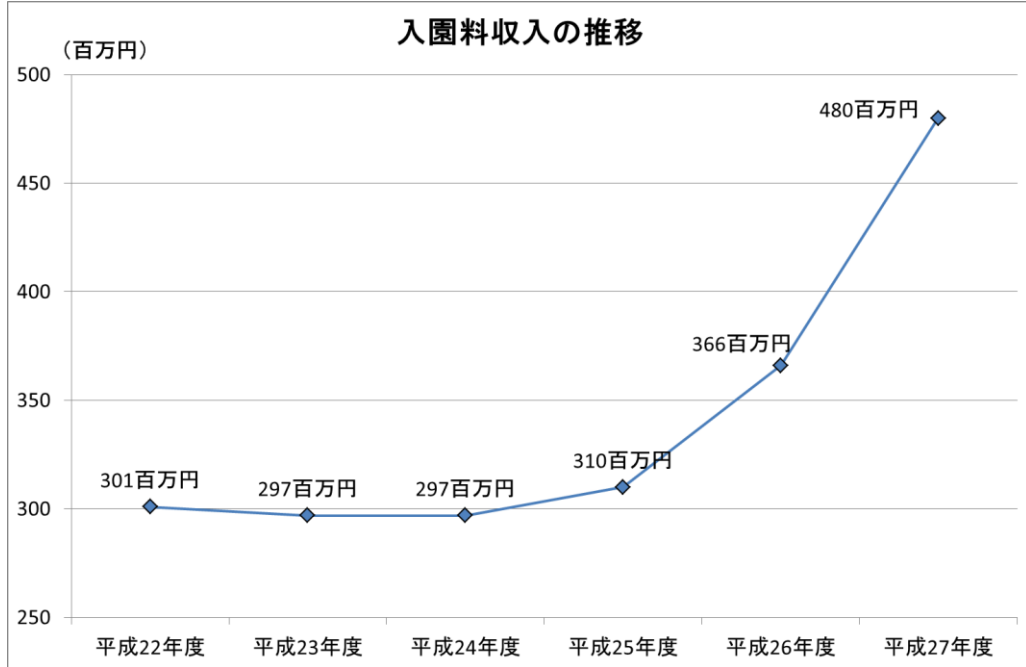
※平成 25～27 年度のいずれも日本動物園水族館年報より (ただし、当園は実数)

2. 収支

(1) 入園料収入の推移

入園料収入は、平成25年度までは3億円前後を推移していましたが、入園者数の増加に伴い、平成26年度以降は増加傾向にあります。

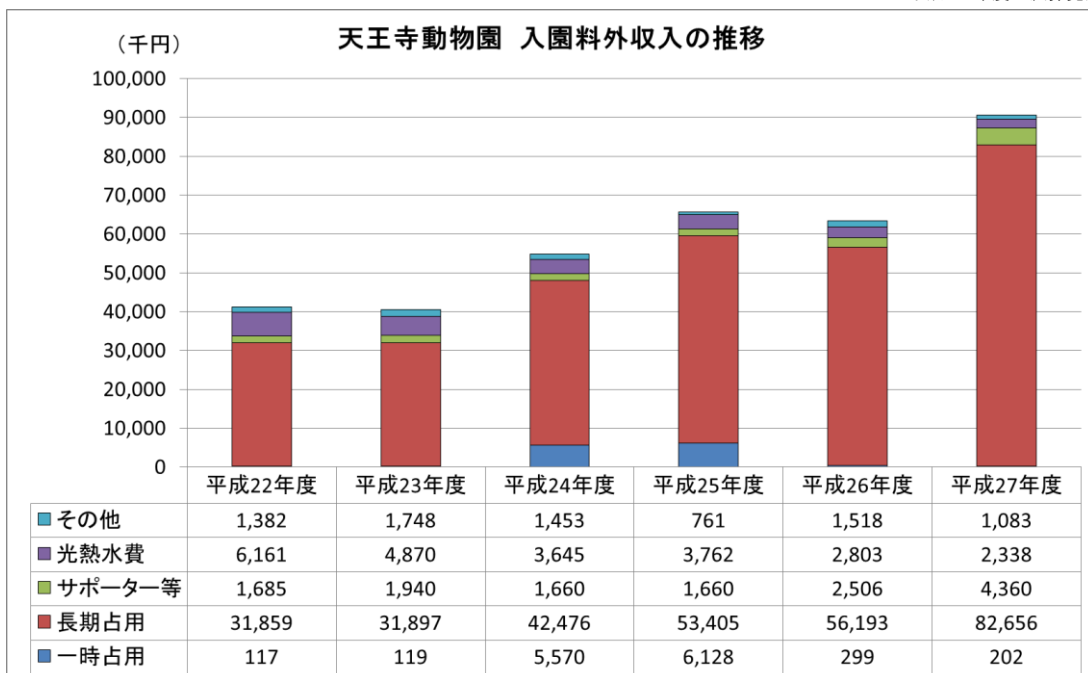
※平成27年度は決算見込



(2) 入園料外収入の推移

天王寺動物園における入園料以外の収入としては、売店・食堂などの建物の管理設置許可収入である「長期占用」、同事業のために使用した電気・ガス・水道料金の戻入の「光熱水費戻入」、工事のための占用や集会などに使用される「一時占用」、当園サポーター制度による収入などがあります。

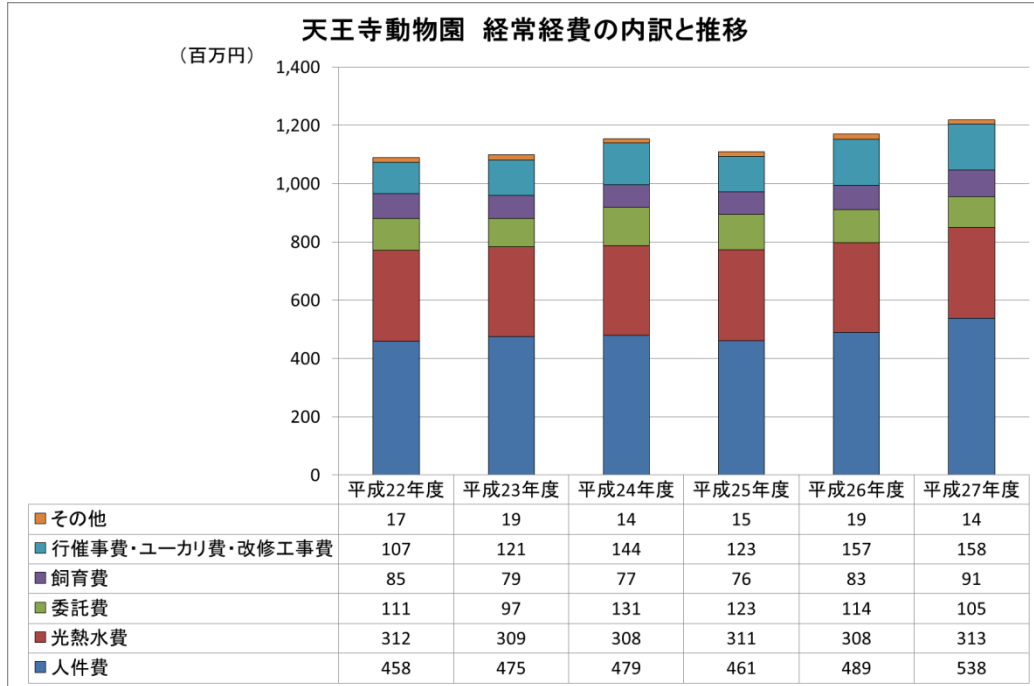
※平成27年度は決算見込



(3) 経常経費の内訳と推移

経常経費全体として、平成22年度より11億円前後を推移しています。これまでさまざまな経費削減策を取ってきたものの、いずれも頭打ち感があります。光熱水費については、ESCO事業を平成29年度より爬虫類生態館(アイファー)及びカバ舎に導入し、削減を図っていく予定です。

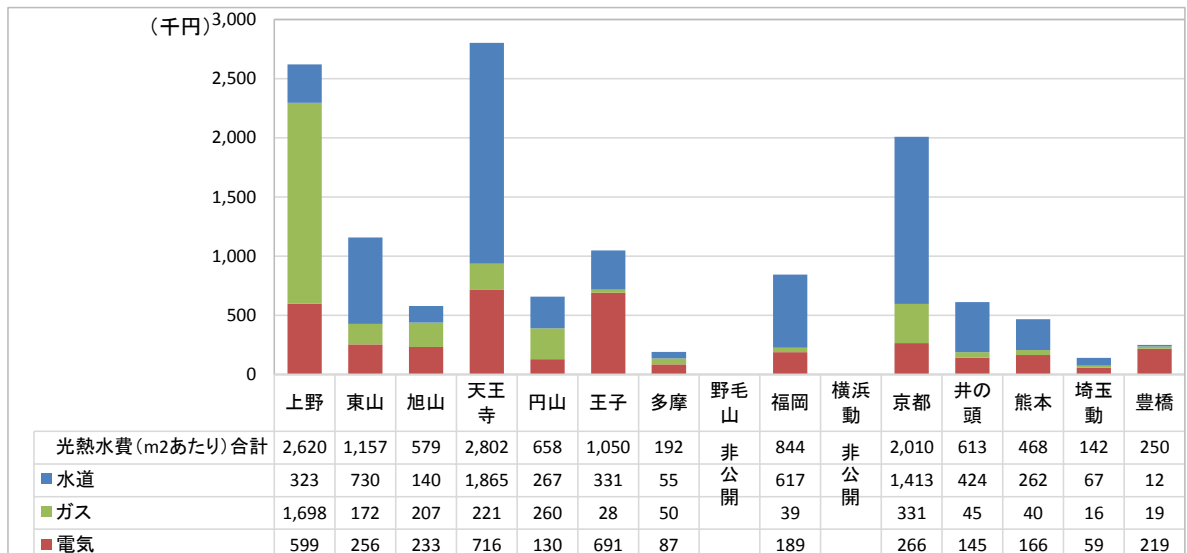
※平成27年度は決算見込



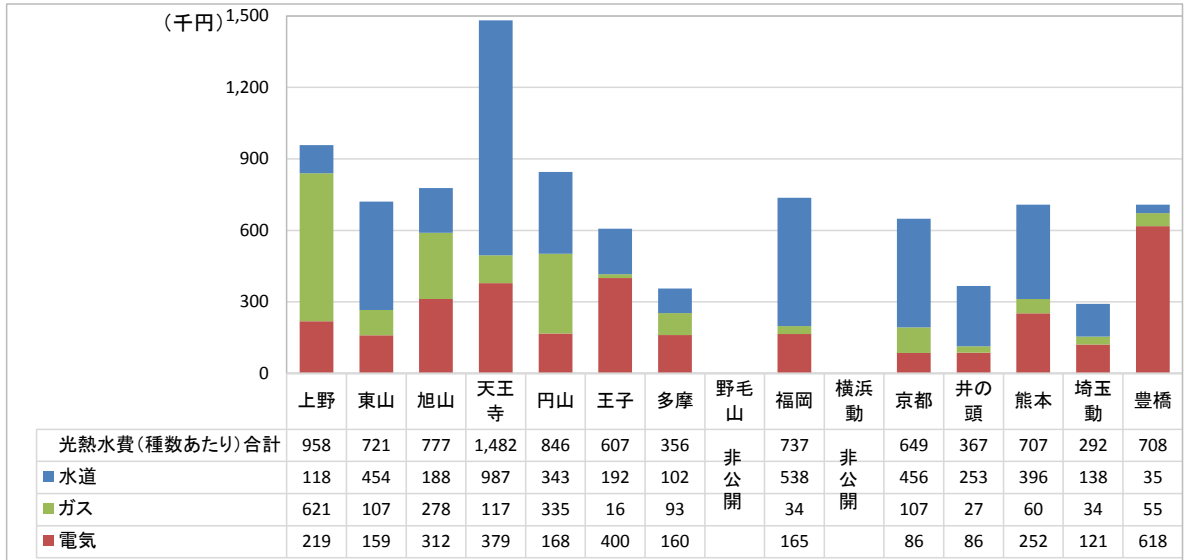
(4) 公立動物園の入園者数上位15園の光熱水費比較(平成26年度)

平成26年度における公立動物園の光熱水費は、以下のグラフのとおりとなっています。各園によって飼育動物の種類や施設・設備が異なること、特に水道料金については自治体毎に単価が大きく異なることから、単純な比較はできませんが、面積あたり及び飼育動物種数あたりで比較すると、当園の光熱水費は顕著に高額となっています。

面積あたりの光熱水費



飼育動物種数あたりの光熱水費



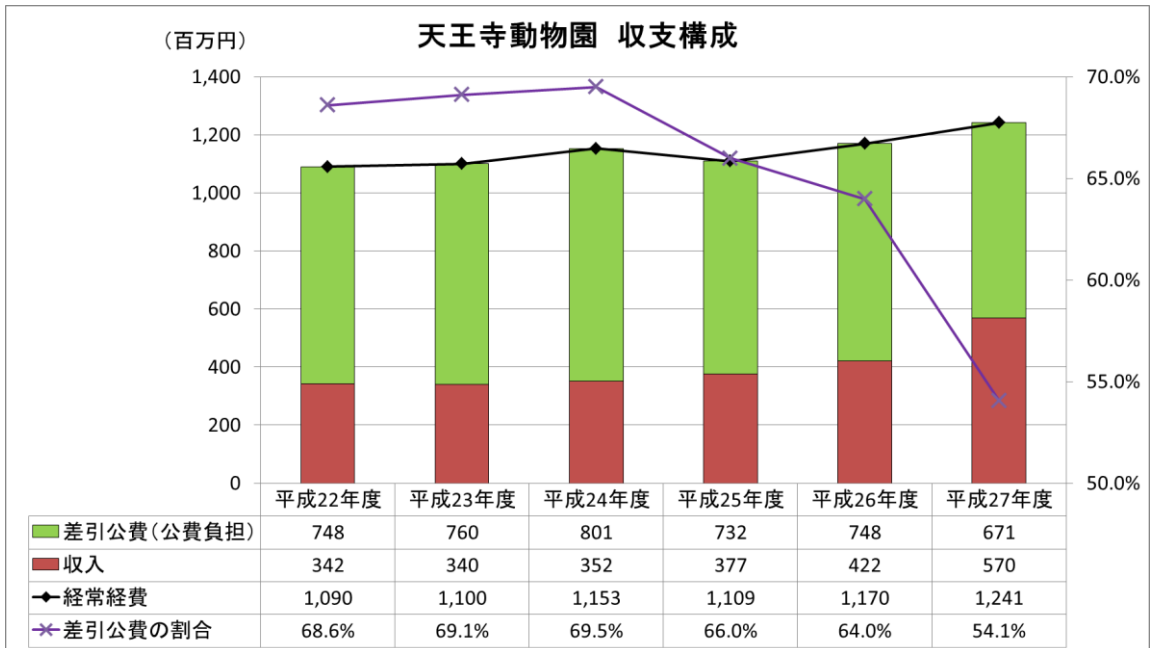
※平成26年度日本動物園水族館年報より

※総面積の単位は千m²、費用の単位は千円

3. 公費負担率の推移

経常経費に対する公費負担率は、平成22年度から平成24年度までは7割弱を推移していましたが、入園者数及び入園料収入が増加したことから、平成26年度には64%まで下がっており、平成27年度については54%まで下がる見込みです。

※平成27年度は決算見込



4. 職員構成

(1) 職員構成

平成27年度における職員構成は以下のとおり。

職種	人数
動物飼育	35人
動物管理 (うち、獣医)	13人 (9人)
管理運営	20人
施設管理	16人
合計	84人

※単年度配置の施設管理（美装化チーム）22名は除いている。

5. 飼育動物関係

(1) 飼育動物種数・点数（平成28年3月現在）

	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	無脊椎動物	計
種数	59	66	57	16	14	1	213
点数	336	441	202	77	—	1	1,057

6. 教育普及活動

天王寺動物園では、教育普及活動として、一般来園者に対してのものと事前に依頼を受け実施するプログラムがあり、それぞれ年間下記の回数実施しています。

天王寺動物園における教育普及活動（平成26年度）

■一般来園者対象のもの

獣医さんのお話	月1回
飼育係による動物君たちの一日	月1回
ボランティアによる絵本の読み語り	月2回
動物園サマースクール	4日間
動物相談	234件
飼育係によるワンポイントガイド	3,068回
その他の教育普及イベント	192回

■依頼により実施したもの

動物ショート・ガイド	26回
ズー・スクール	95回
動物園ガイドウォーク	49回
職業体験講座	33回
動物園・職場紹介	35回
動物園・職場紹介出張スクール	37回

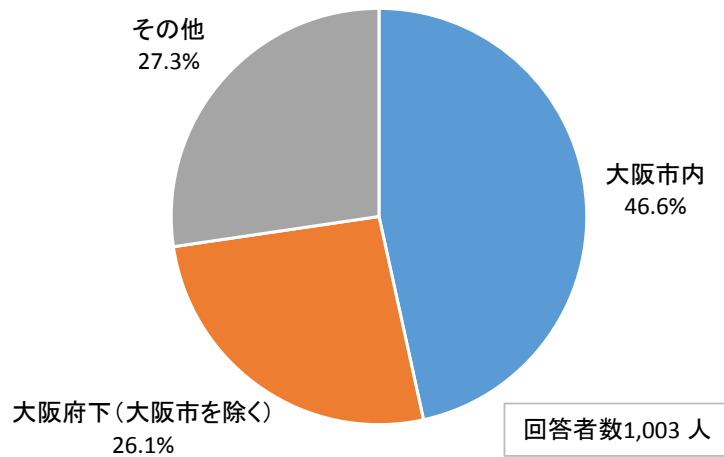
7. 来園者データ

7-1 国内来園者

当園では、アンケート台を園内に据え置いて任意での記入により来園者アンケートを実施しています。本項で紹介するデータは、平成27年4月から9月までの来園者アンケートを集計したものです。なお、アンケート様式が日本語のみのため、外国人からの回答はほとんど含まれていないものと考えられます。

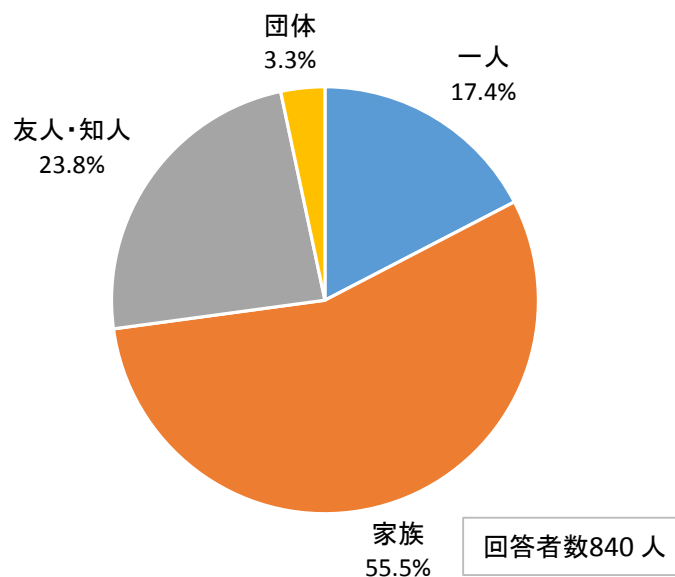
<お住まいの地域>

居住地は、「大阪市内」が46.6%で最も多く、次いで「その他」が27.3%、「大阪府下（大阪市を除く）」が26.1%でした。「その他」では、兵庫県、奈良県、東京都、京都府、滋賀県と、大阪近郊の府県と東京都が多くなっています。



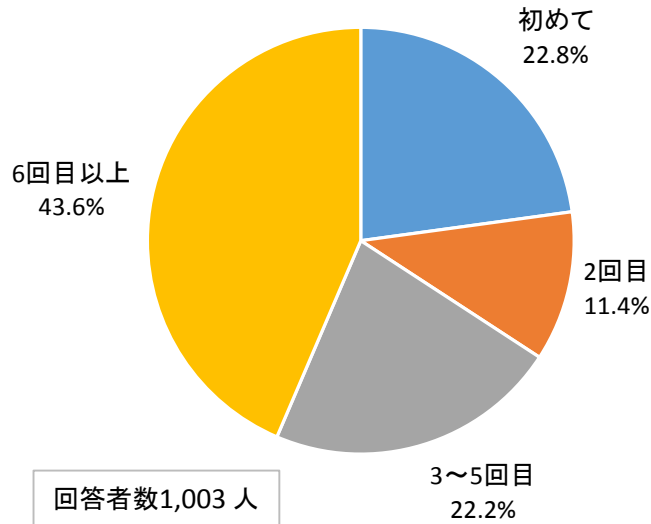
<ご来園構成は（ご来園の人数）>

来園の構成は、「家族」が55.5%で最も多く、次いで「知人・友人」が23.8%、「一人」が17.4%でした。



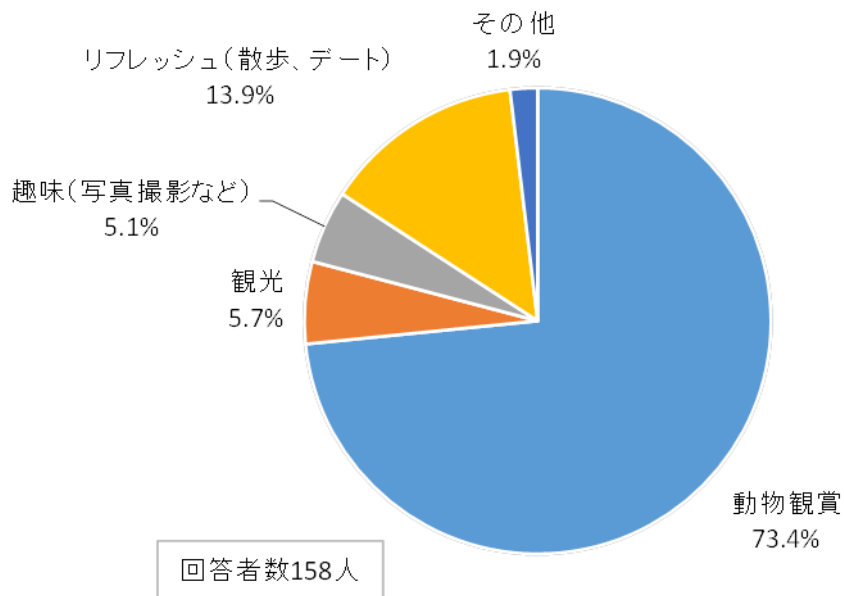
<お越しになられたのは>

来園回数は、「6回目以上」が43.6%で最も多く、次いで「初めて」が22.8%、「3～5回目」が22.2%でした。2回目以上の方が約4分の3以上を占めています。



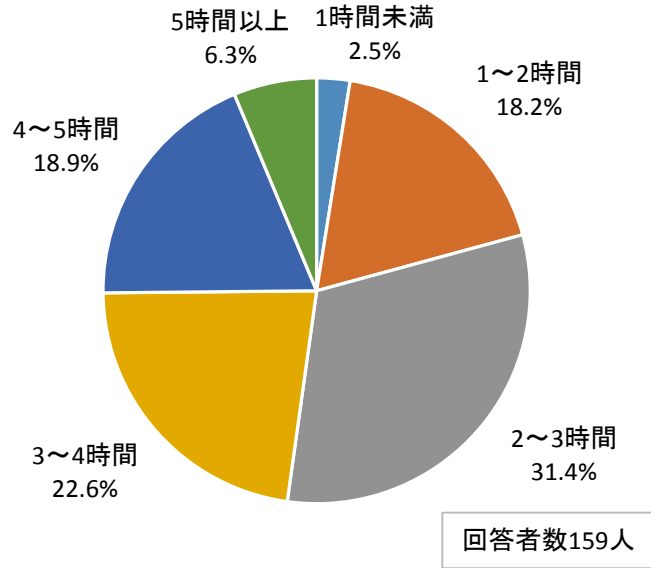
<来園の目的は>

来園の目的は、「動物観賞」が73.4%で最も多く、次いで「リフレッシュ（散歩、デート）」が13.9%、「観光」が5.7%でした。



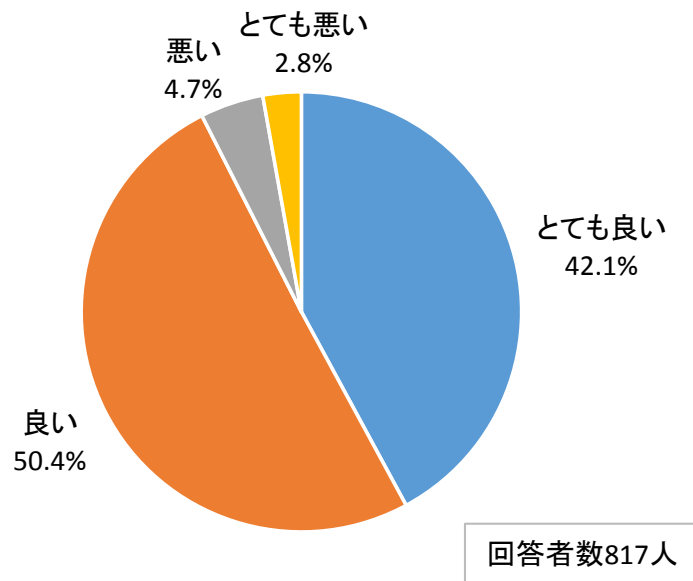
<園内におられた時間>

園内での滞在時間は、「2～3時間」が31.4%で最も多く、次いで「3～4時間」が22.6%、「4～5時間」が18.9%でした。



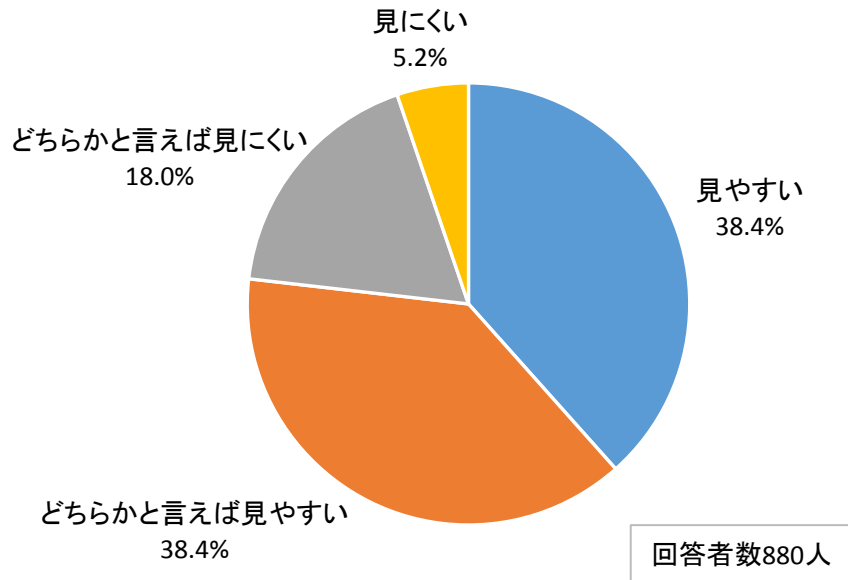
<現在、天王寺動物園では知識・思い出・体験を少しでもお持ち帰りいただけるよう心がけています。職員の対応や雰囲気はどうでしたか>

職員の対応や雰囲気は、「良い」が50.4%で最も多く、次いで「とても良い」が42.1%、「悪い」が4.7%でした。



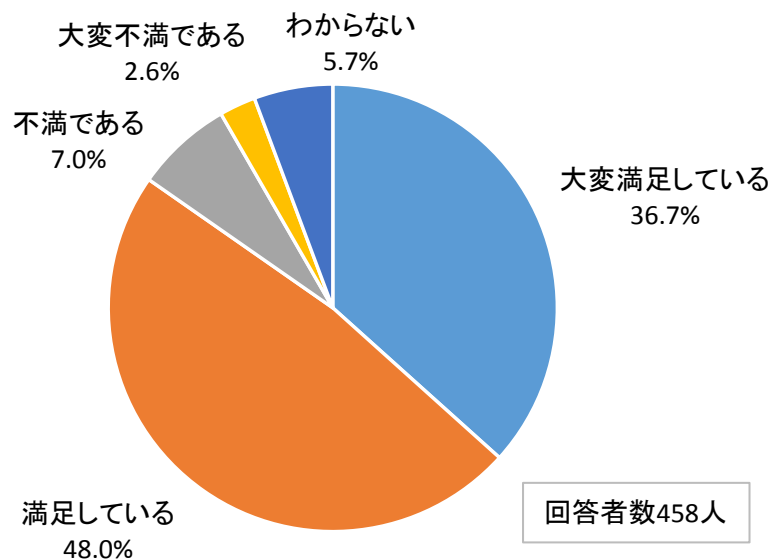
<展示動物の見やすさはいかがでしたか>

展示動物の見やすさは、「見やすい」と「どちらかと言えば見やすい」が38.4%で最も多く、次いで「どちらかと言えば見にくい」が18.0%、「見にくい」が5.2%でした。



<天王寺動物園に対する総合的な満足度をお聞かせください。>

動物園の総合的な満足度は、「満足している」が48.0%で最も多く、次いで「大変満足している」が36.7%、「不満である」が7.0%でした。



<園内の良かった点、悪かった点など、お気づきになられたことがありましたら、ご記入ください。>

園内の良かった点、悪かった点としてご意見をいただいたのは、「動物の見せ方・設備」が22.0%で最も多く、次いで「動物の種類・数」が9.6%、「お土産・売店」が9.0%でした。

7-2 インバウンド

(1) 外国人観光客入園者数（推計）

ゲートで入園者を観察した結果、大阪周遊パスを利用している人の大半が外国人でした。この結果を踏まえ、周遊パス利用者の数を外国人入園者の動向の代理指標として扱うこととしました。さらに、ゲートでの観察結果を踏まえ、周遊パスを利用せずに入園した人も含めた外国人入園者総数を周遊パス利用者の1.4倍と推定しました。

推計の結果、平成27年度外国人来園者数は前年度より、ほぼ倍増しているとみられ、入園者全体の7%に達していると考えられます。

	大阪周遊パス利用 入園者数(a)	外国人入園者数 推計(a×1.4)	動物園入園者 総数	外国人入園者 比率
平成26年度	45,343人	63,480人	1,363,988人	4.7%
平成27年度	86,879人	121,630人	1,730,606人	7.0%

(2) アンケート調査

外国人入園者へのアンケートを関西外国語大学の協力を得て、下記の日程で実施しました。

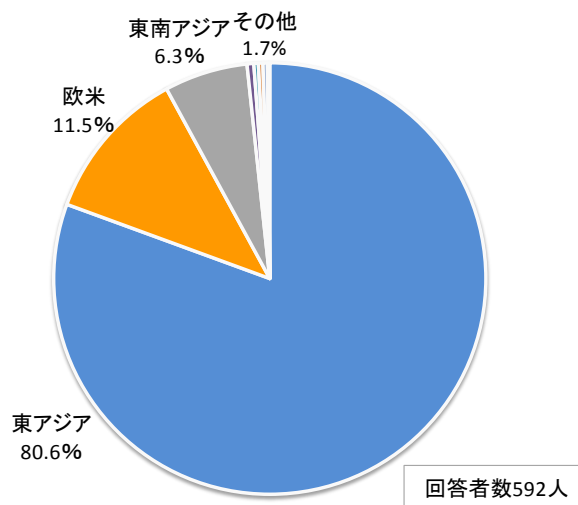
【アンケート調査実施日】平成27年6月28日、30日、7月4日、5日
11月28日、12月5日、6日

【調査方法】動物園出口ゲート付近での聞き取り調査

【出典】関西外国語大学PBL(Project Based Learning；課題解決型授業)
平成27年度最終報告会資料

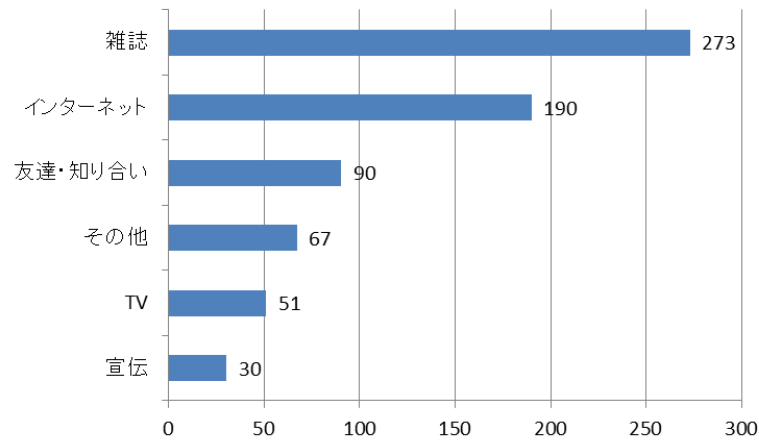
《国籍》

香港、韓国、台湾、中国など東アジア地域からの入園者が全体の80%を占めています。東南アジアも含めれば、アジアからの入園者が約88%を占めています。



《動物園の情報》

来園のきっかけとなる動物園に関する情報の入手先としては、雑誌等 273 人、インターネット 190 人、友達・知り合い 90 人の順に多いという結果でした。(複数回答あり)



8. 経営形態

平成 27 年度における公立動物園の入園者数上位 15 園の経営形態は以下のとおりです。なお、指定管理者制度を導入した園では、管理者として当該自治体が所管する公益財団法人を指定している例が多いです。なお、国内の全ての公立動物園において、地方独立行政法人の制度を採用している施設は現在のところ存在しません。

施設名称	経営形態	管理者
恩賜上野動物園	指定管理者	(公財) 東京動物園協会
東山動物園	直営	名古屋市
天王寺動物園	直営	大阪市
旭山動物園	直営	旭川市
王子動物園	直営	神戸市
よこはま動物園	指定管理者	(公財) 横浜市緑の協会
京都市動物園	直営	京都市
野毛山動物園	指定管理者	(公財) 横浜市緑の協会
多摩動物公園	指定管理者	(公財) 東京動物園協会
円山動物園	直営	札幌市
福岡市動物園	直営	福岡市
井の頭自然文化園	指定管理者	(公財) 東京動物園協会
豊橋総合動植物公園	直営 (一部指定管理者)	豊橋市 (公財) 豊橋みどりの協会
姫路市立動物園	直営	姫路市
熊本市動植物園	直営	熊本市

参考 2 用語解説

	用語	解説	該当ページ
あ	ICT (アイシーティー)	IT の概念をさらに一歩進め、IT=情報技術に通信コミュニケーションの重要性を加味した言葉。 Information and Communication Technology の略。	4-8
あ	ISIS (アイエスアイエス)	国際種情報システム機構 International Species Information System の略。 世界各国の動物園水族館が加盟しており、飼育動物の個体情報を集積するためのデータベースを管理運営している。	5-3, 9-16
あ	アカデミー	学芸に関する教育・研究機関の称。	3-4
あ	アクティブ・ラーニング	教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。また、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業。	5-9
い	ESD (イエステイ)	持続可能な社会づくりの担い手を育成するための教育のこと。 Education for Sustainable Development の略。	5-7
い	異常行動	自然の中で暮らす動物には見られない行動。檻の中や狭い空間に閉じ込められたり、社会性が失われたりした動物にみられることがある。同じところを行き来する、首を左右に振り続けるといった同じ動作を反復して繰り返す行動（常同行動）などがよく知られている。	6-1
い	遺伝的多様性	ある一つの種の中での遺伝子の多様性のこと。計算された計画的な種の管理を進めることで、飼育下個体群の中でより血縁関係の少ない個体の繁殖を推進し、多様性を確保することが重要とされている。	5-4, 5-12 9-15
い	イニシャルコスト	新しく事業を始めたり、新しく機械や設備などを導入したり、新しく建築物を建築したりするときなどに、稼働するまでの間に必要となる費用のこと。初期費用。	6-2
い	インバウンド	外国人が訪れてくる旅行のこと。	4-14, 7-1 9-11
え	エコ・フレンドリー	「環境に優しい」の意。	6-14

	用語	解説	該当ページ
え	SNS (エスエヌエス)	インターネット上の交流を通して社会的ネットワークを構築するサービスのこと。Social Networking Service の略。	4-7
え	ESCO (エスコ) 事業	事業者が顧客の光熱水費等の経費削減を行い、削減実績から対価を得るビジネス形態のこと。Energy Service Company 事業の略。	7-2, 9-4
え	NPO (エヌピーオー)	民間非営利団体。社会的な問題に、非営利で取り組む民間団体。Non-Profit Organization の略。	4-4, 4-6 4-15, 9-15
え	エポック	新しく画期的な時代、のこと。	6-1
お	大阪周遊パス	観光施設の入場と大阪市内の電車・バスの乗り放題がセットになった、電子カード式の観光乗車券。天王寺動物園での利用も可能。	9-11
お	OJT (オージエイティー)	職場で実務をさせながら行うトレーニングのこと。On-The-Job Training の略。	4-12
お	小沢圭次郎	元桑名藩（現在の三重県）士で、造園家、作庭家。近代初の造園研究家で、日本造園史の研究に多くの功績を遺した。天保13年生－昭和7年 91歳で没。	6-20
か	ガイドウォーク	天王寺動物園で実施している教育普及プログラム的一种。動物園の職員が園内を一緒に歩きながら、動物についての解説を行ったり、動物園の見どころを紹介する。	5-1, 5-8 5-9
か	環境エンリッチメント	動物福祉の立場から、飼育動物の幸福な暮らしを実現するための具体的な方策のこと。エンリッチメント (enrichment) = 充実。	4-3, 4-4 5-5, 6-18 6-19, 6-21
き	企業メセナ活動	企業が、社会貢献の一環として行う芸術文化支援活動のこと。メセナ (mécénat) = フランス語で「芸術文化支援」を指す。	4-18
き	QOL (キューオーエル)	生活の質のことを指す。ある動物がどれだけその種らしく生態に基づいた生活を送り、幸福に感じているかを尺度としてとらえる概念。Quality of Life の略。	5-5, 6-1 6-14, 6-21
く	クラウドファンディング	不特定多数の人がインターネット上などで、他の人々や組織に財源の提供や協力などを行うことを指す。群衆 (crowd) と資金調達 (funding) を組み合わせた造語。	4-17, 7-5
け	齧歯類 (げっしるい)	哺乳綱齧歯目 (ネズミ目) に属する動物の総称。物をかじるのに適した歯と顎を特徴とし、多くは草食性であるが、雑食性のももある。	6-22
け	検疫	動物の病気の侵入や拡散を防ぐために、対象動物を一定期間隔離し、状態確認や検査等を行うこと。	5-4, 6-30

	用語	解説	該当ページ
け	現業管理体制	現業職場の日常的な職場運営や作業計画を行う現業職の管理を行うリーダーを頂点とした体制。	7-5
け	検体バンク	将来の人工繁殖や調査研究に備えて、多種多様な動物の各種組織や細胞を保存管理し、必要に応じて利用できるようにしておく取り組み、および保存されている検体全体のことを指す。	5-10
こ	公費負担率	動物園の運営に対して必要な経費のうち、入園料収入をはじめとする収入で賄い切れていない、税等によって補填されている割合のこと。 公費負担率(%) = (経常経費 - 収入) / 経常経費 × 100 ※収入 = 入園料収入 + 入園料外収入	7-1, 7-3, 9-5
こ	個体群管理 (飼育下個体群管理)	複数の施設で飼育されている同種の動物のすべての個体を、一つの群れとして捉えて管理すること。個々の施設が飼育できる種ごとの個体数は限られており、性比や年齢に偏りが生じることも多い。そのため、多くの種においてそれぞれの施設が単独で長期的に維持していくことは困難である。よって、複数施設の個体を一群と捉えることでより多くの個体を対象として、個体数の動態や遺伝的多様性に配慮しつつ計画的に個体の施設間移動やペア形成を行うことが求められている。	5-4
こ	コレクション計画	飼育動物の収集・管理計画のこと。天王寺動物園では、新たな計画を平成 27 年 3 月に策定した。	4-2, 4-3 5-1, 5-4 6-6, 6-23 6-30
こ	コロニー	植民地のこと。派生的に、一地域に定着した生物集団のことを指す。一地域に集まって暮らしている同種動物の集団を指すことが多い。	6-37
こ	コンテンツ	中身、内容、容量、項目、意味のこと。	4-2, 4-5 4-6, 4-7 4-10, 5-3
こ	コンポスト	動物のフンなどの有機物を微生物や菌などの作用により発酵させ、植物の成長に利用できるようにした堆肥のこと。	6-9
し	CS (シーエス)	顧客満足のこと。Customer Satisfaction の略。	4-12, 6-32
し	指定管理者制度	地方公共団体やその外郭団体に限定していた公の施設の管理・運営を、株式会社をはじめとした営利企業・財団法人・NPO 法人・市民グループなど法人その他の団体に包括的に代行させることができる制度である。	9-12

	用語	解説	該当ページ
し	市民サポーター制度	5,000 円を支払いいただいた方に、10 回分の入園が可能なスタンプカードを提供。実質的には、寄付というよりも実態として回数券として機能している。また、特典として、サポーターズデイを設け、バックヤードツアー等を実施している。また、10 回分利用した方には景品を提供している。	4-17
し	ZIMS (ジムズ)	動物情報管理システム I S I S によって運用されているシステムで、動物園水族館で飼育されている動物の個体情報データベース。Zoological Information Management System	5-3
し	JAZA (ジャザ)	公益社団法人日本動物園水族館協会 (Japanese Association of Zoos and Aquariums)。日本国内の 151 の動物園・水族館で構成されている法人。「種の保存」「教育・環境教育」「調査・研究」「レクリエーション」の 4 つを目的として活動している。	5-4, 5-6
し	出張講話	天王寺動物園で実施している教育普及プログラム的一种。希望の会場に職員が出向き、動物に関する講話を行う。大阪市内に限る。	4-5, 5-1 5-9
し	種の保存	生物の種の絶滅を防ぐこと。特に、捕獲・採取・輸出入の制限や人工繁殖などの活動を通じて、積極的に種の存続を図ること。	3-1, 3-3 5-12, 6-3
し	ショートガイド	天王寺動物園で実施している教育普及プログラム的一种。飼育係が動物舎の前で、動物の特徴や餌などの説明を行う。	5-1, 5-8 5-9
す	ZOO21 計画	老朽化施設の計画的な更新を目指し、平成 7 年に策定された天王寺動物園のマスタープラン。主に施設整備計画として取り扱われ、様々な生態系を再現した生態的展示を基本とした。	1-1, 4-2 6-1, 6-2 7-4
す	ズーフレンズ会議	天王寺動物園開園 100 周年を記念して設立された、未来の天王寺動物園について、共に考え、行動するための動物園の「トモダチ」コミュニティ。天王寺動物園と、一般市民・企業との懸け橋となる存在として、世代を超えて、市民目線で動物園を活性化していくためのボランティア組織。	3-4
す	スーベニアショップ	お土産物店。	6-9, 6-31 6-32, 6-38
す	スポンサード	「資金提供を受ける」の意。	4-6, 4-18
そ	ゾーニング	施設全体の設計手法。類似した性格や使用目的の建築物・空間などをまとめ、「ゾーン」をつくること。	4-9, 6-8 6-10
せ	生態的展示	地形や植栽などで景観を作り込むことにより、動物が野生で生息している環境をできる限り再現し、動物と生息環境とのつながりに対する理解を促すとともに、動物の生態により即した飼育環境の提供を目指す展示手法のこと。	1-1, 2-1 4-3, 6-1 6-2, 6-3 6-5, 9-17

	用語	解説	該当ページ
せ	生息域内保全	生物を自然の生息環境において保全すること。	5-6, 5-12
せ	生息域外保全	生物を自然の生息環境外において人間の管理下で保全すること。	5-6, 5-12
て	てんしば	平成 27 年 10 月にリニューアルオープンした天王寺公園エントランスエリアの愛称。	4-8, 4-10 4-13, 6-6 6-14, 6-17, 6-31, 6-37 6-38, 9-1
と	動物園改造 9 ヶ年計画	昭和 35 年から 44 年にかけてそれまでの檻式の動物舎を無柵放養式に改造していった獣舎整備計画。現在でもクマ舎、ムフロン舎（旧バーバリシープ舎）などが残存している。	1-1
と	動物倫理規定	動物福祉の考え方に基づく、動物の管理や取扱いにおいて遵守し実行すべき行動規範	5-5
と	トータルコスト	建物の建設（計画・設計）から使用期間、そして解体までにかかる費用を合わせたもの。	6-2
と	地方独立行政法人	日本における法人のうち、地方独立行政法人法（平成 15 年法律第 118 号）に規定される「住民の生活、地域社会及び地域経済の安定等の公共上の見地からその地域において確実に実施されることが必要な事務及び事業であって、地方公共団体が自ら主体となって直接に実施する必要のないもののうち、民間の主体にゆだねた場合には必ずしも実施されないおそれがあるものと地方公共団体が認めるものを効率的かつ効果的に行わせることを目的として、この法律の定めるところにより地方公共団体が設立する法人」をいう。	9-12
に	ニッチェ（ニッチ）	ある生物が生態系の中で占める位置を意味する生態学用語。生態的地位。	6-8
ね	ネーミングライツ	人間や事物、施設、キャラクターなどに対して命名することができる権利。命名権。	4-18, 7-4
は	ハズバンドリートレーニング	動物の自発的行動を発現させるような飼育手法を用いて、飼育者が望む行動を飼育動物に発現させるためのトレーニング。動物を長期的に健康的に、なおかつ人も安全に飼育することを目的として近年様々な動物種を対象として導入されている。	4-3, 5-5 7-5
は	バックヤード	一般的に、展示物等を保管しておく倉庫などがある施設の裏側、またはそのスペースのことを言う。動物園では、一般来園者が立ち入りできないエリア全体のことを指す場合もある。展示していない動物舎が含まれることもある。	4-6, 5-4 6-2, 6-9 9-16

	用語	解説	該当ページ
は	パドック	補助的に設けられた小さな運動場のこと。	6-29
は	パブリシティ	企業や団体が、マスコミなどに対して積極的に情報公開するなどして、報道されるよう働きかけること。	4-7
は	バリア	障害物のこと。	4-9, 6-37
ひ	P F I (ピーエフアイ)	1990年代に英国において行財政改革を推進する過程で生まれた公共事業の実施手法の一つ。公共施設等の整備等にあって、民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用することにより、効率的で質の高い公共サービスの提供を図るもの。	7-4
ひ	ピクト	絵文字、絵単語のこと。ピクトグラムの略。	4-14, 6-35
ふ	プレゼンス	存在感、影響力のある存在のこと。	5-4
へ	ペDESTリアンデッキ	広場と横断歩道橋の両機能を併せ持ち、建物と接続して建設された、歩行者の通行専用的高架建築物のこと。	6-32
ほ	ホスピタリティ	おもてなしの心を持ち、様々なサービスを提供すること、またはその精神。	3-2, 4-1 4-10, 4-12
む	無柵放養式	檻や柵などを使用せず堀（モート）を用いることで、観覧者と飼育動物の間に視界を遮る構造物が存在しないようにした展示方式。	1-1, 9-17
も	モニタリング	計画の効果や達成度について分析し、評価する一段階のこと。	4-12
ゆ	ユニバーサル	「普遍的な」といった意味から、「すべてのひとのための」の意。	4-9
ら	ランニングコスト	施設などの稼動が始まってから使い続けるために必要となる費用。光熱費や各種消耗品代、メンテナンスにかかる費用、定期的に支払う利用料などが含まれる。	6-2
る	ルーティン化	もともと不定期に行っていたものを一連のものとしてパターン化し、定期的実施していくこと。	4-7
わ	ワークショップ	学びや創造、問題解決やトレーニングの手法。本来は「作業場」や「工房」のことを指すが、現在においては参加者が経験や作業を披露したりディスカッションをしながら、スキルを伸ばしたり、方針や結論を導き出す場のこと。	4-6
わ	WAZA (ワザ)	世界動物園水族館協会 (World Association of Zoos and Aquariums)。1935年に設立された世界の動物園・水族館で構成されている団体。各国の動物園水族館協会や個別の動物園・水族館が加盟している。	5-4